

新  
説  
小  
簾  
の  
月

760  
1323

094140-000-4

特30-537

新説小簾の月

日吉堂

M23

DBQ-1620



特

5

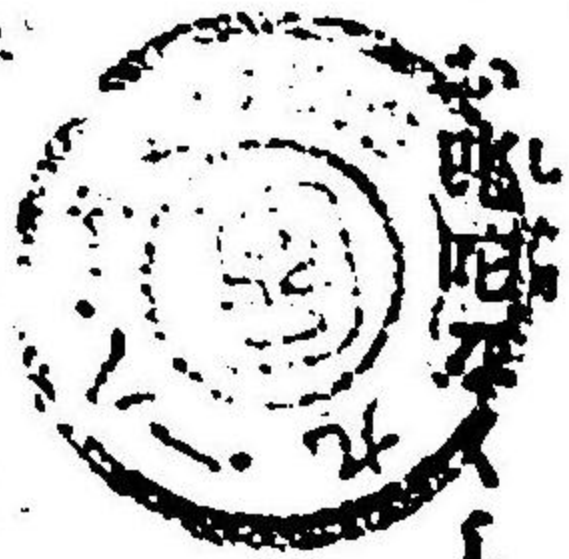
特30  
537  
No 5468/23

○小簾は月序

朝野の紙上に照し。小簾の月影世を益して。其高評を敏くも察し書肆は之れを  
編者乞ふて。一部に纏むる流行の小冊。其の美麗なるは輝子の如く。体裁の高尙  
なるは時介に比へんか。元と此説話はありやなしや開は讀む人の感觸にあれども  
かりとせんか。眞と迫れり。なきとせんか。架空ならず。爾れば實事と想ふて讀  
むべし。深く自ら曉る處あらん。偶々編者の寓居を訪ひしに。談の序文をど需め  
られしが。余新聞記者とは名乗れど。元來普通の雜報書聽かしか。ものから  
どか小説の味未だ嘗めねば纏めた譯は書けぬが持前。況んや錦繡玉文の序文な  
どは鳴濤がまじと。通口上は云つたもの。其内心は盲目蛇。怖れぬと云ふ  
諭の通り。ヌラ〜と序文の條。ア、此月に此雲なくばと。唯唯と入して只  
本文の。さやけと影とは御愛讀あれ

まばらしくは風情や月に走り雲

彩霜園柳香述





野見時次

表井刀  
長崎屋

表井刀

新説小簾の月

第一回

小簾の月は編者がささばい成れる例の果敢なき無稽談なり彼の世態人情を寓すの事風俗慣習を進むるの爲尙ほ事慣れぬ編者が筆は固より及びも付かざるとなれど臆し句ふ春の夜の天黒白なき筆も打捨玉はするの臆げの小簾の月ともうち見玉は幸ひになん

凡そ世に幸あると幸なきとは人の善悪に因らざるに似たれを邪にして榮ゆるは麻糬の火の如く一旦熾んなりと雖も消るゝ速なり心正くて苦むと泥沙も濁る水の如く日を経らば争で元の清さに復らざらん然るを人々皆な其私の怨み替み自己が榮華を求めん爲よは他人を虐げ親戚を傷つけ又た甚だしきに至りては骨肉の親を割きながら敢て心に恥ぢざるものあり豈痛みても痛むべきならや閑話休題の愛よるの元來の何れ如何なる人とも知らず維新の際より東に移ろひ番町邊に館を定め爵禄とも



に卑しからざる某家となん申されけるは父公先ごろ物故り玉へて世子武定君世を襲  
れしかとまた少壯き御身なればとて夫人さへも迎ひ取られせ家政の凡て家扶に任し  
て内外ともに疎略がち朝は北里に春を惜みて花の涙に袂を濡し夕は新橋に月を弄  
して心のまゝに遊行れ給へりとの令妹は輝子といふ姫君あり今年二入の春を迎へる  
の容色を打優れし最と臆聞けてさへ見ゆさせければ日ごろ往來ふ同族の中にも  
我れ請ひうけて我が妻とせん夫とならんと心を悩まし媒妁を選ひ傳手を求めて首  
寄る公達も少なからねと輝子は何か思し立ちてや否とのみにて話ひを給はず只讀書  
と和琴の餘暇或ひは夜會の舞踏など時に觸れての心慰みに懐き月日を送り給へば  
令扶の族親戚迄も今は強がち勤む可からず一つ二つも春を添へなばと其後は此の如  
汰絶果しけり然れば輝子は耳甚難き縁談も聞かずなり今は心も安らかなりとして夫  
り近き學校に通學し更に他事なく見わたるが是に引かへ武定君は益々驕侈淫逸  
して學習院の設けはあれと更此れにも通ひ給はせ日々放蕩し身を持崩すを親類  
ても見るに堪せ華族の長くも帝室の書屏位四民を異なるとゆふ文武何れにか身と委

ね勅旨に副へ奉らすては先祖の威徳を種す業と懸ろし脱離さるれと空應答をなせ  
のみよて更よ心に懸給まはせ彌々驕奢増長な時しも四月中旬の事庭前の櫻爛熳と  
咲乱れ春色言ふべくもあらざればとて日頃君の鼻息を窺ひた舞の廣をうち拂ひては  
自在の紙の餘徳を仰ぐ幫間藝人藝妓の誰れ彼れ少からせ邸に集めて庭の花をかこつ  
けよ唄ひつ舞つ遊興の庭に輝子も押据られて好まぬながら兄の仰せ是非なく幾時か  
玉簾の數重なりては其座に得も堪へられす剛一行くと其の機として座敷を脱れ往來  
近き高樓に來て酔を吹する玉簾の微風うれとは知らずこの奥庭に浮れ立たる三絃の  
音に何事ならんと耳を欬べて邸外に曙らふ一個の少年輝子は思はせ顔見合せしが心  
願きて穩やかならずハット計りに障子を閉切さて密やかにぞ窺ひ居よける方にこれ  
天台春深くして花は恨みあり武陵水暖かにして津通するに堪ふ是より春色如何にあ  
るらん其は後回

第二回

人知れず懸 我身は沈めどもみる目よ浮くは涕なりけり輝子は幾日吾が邸宅よ花見

の宴あり折好まぬ酒を強られて得堪ぬ儘の酔覺し風に吹れて居る折柄固らず染地の外に躊躇はり居りし人を視て心染やと慕かしく思ひしが遂に苦勞の根原となる畫の幻し夜は夢只其人の餘影の眼に透りて忘れぬれ言寄る傳わらば想の丈と告なましと朝な夕なに啣ちつゝ我から細る秋の虫音ころ立ねと人知れず信田の森の萬の葉のうらみ勝なる心の中遺瀨なければ今日も又奥の一間に只獨り賣ては憂を解れべき友にもがなと掻鳴を琴の唱歌も意夫戀身に切さるれば是さへも樂しからず離て播遣りやとら障子を押開きて未肌寒き春風も無情を見せて散る花の景色も最と憐れなるに我を忘れて庭の面瞻望入たる折から一椽側傳ひひそくと歩み來れる乳母のお豊輝子を見つゝ莞爾と笑貌を作り座敷入り珍らしいに姿ゆる折角聞うと存じましたゝ惜い處てお止なせつた夫は然と姫様へ貴女は此節驚々と物思はしきお顔色何か知らねとれ心に不適事でもある御様子定めて譯がありませうがお構ひなくは其譯を聞せなすつて下さいまし及ばずながら妾が命に替てもお心の安堵るやうに致しませうサア其譯を仰しやつて御覽じませと懇ろに問へど此方は最と恥しげに袖も

て顔を打掩ひ唯毒々と晩るゝのみ更に返辭も無ししが兩二度押返し問返されて今以早や包みかね「此事計りは如何あつても此身の耻辱になる事故話すまいとは思ふたが和女の實意な心志嬉しいまゝ打明て話すは宜れを若しそれを他人へ告でもした時は如何しやうかと氣懸りで「何のママ妾が其様不埒事として濟まともので御座いませうか御申儀を仰しやらすにチツとも早う其仔細を「夫なら話して聞さうが高うは謂れぬコレ斯とね豊の耳に口を寄せ過し日の事を打明て詳細に語るを聞果れ豊の片頬に笑傾ひけ「姫様とした事が御遠慮深いも事に依る世間に例のないてはな誰にも覺へのある事をお包みなさるに及ばうか大概斯云ふ事であらうとお察し申して居りながら事に紛れて今日までもお尋ね申さなんどのに妾の怠なれと若し貴女より是々と打明話しをなされたら斯まで氣は揉ませじモウ此上は妾が身に引請てお願を叶へてお見せ申しますゆゑ力を盡さず大恥乗た積りでれ心を丈夫にお持なさいまし併し今のお話しては何處のれ方か其人のお名前さへも分らぬ故是には少し當惑なれど何様に廣いと申しても氣長く世間を聞合せて尋ねる中には御覽じま

と退付分つて来ますから兎も角お氣を優長とお持なすつて御病氣の出ない工面をなさいまし何を申ともお命がなくては仕方がありませんと最と老實やかに慰むる談話に暫し時を移しぬ

第三回

茲に櫻田兼房町和洋料理の名も高き賣茶亭の伴待所に休息して居る二人の男一人は羅紗の洋服に一人は紺の股引法被其の形容も著しき是ぞ華族の何某家の取者馬丁とは知れたり取者は馬丁と打對ひて「時々松藏此節の状況で見れば何も彼も思ふ存分へ行さんだが是も全く手前の骨折那の品吉に毒氣を吹込み二人で仕込た悪智悪も今では餘程巧者よなつて若殿さまの鼻毛をよみ悉皆と放蕩者にした腕といつては儘なものだ那いふ女を妹と持た手前は眞實に仕合者すといふに松藏亦措きて「それも其の苦手前には未話さぬが妹の身の上其話しをした時々恐らく何な悪黨でも尻に帆を掛け通るであらう一体那奴は幼少時から己の悪事を見做つて替も棒も懸らぬので兩親さへも持餘し他人の中へ出したなら少しは性根が直らうかと人々願んで

奉公口を捜して居たる親の心早くもそれと氣取つたか疾から乳揉合つて居た近頃のものと手に手を取り結局在所を隨徳寺流れくして東京へ出た御の字つきの股旅なれど初心な造りて柔順よ出かけた鬚を撫てたか出世の足場那遣て今春の自前藝妓と成濟し品吉阿姉の名義を繼で些どは人々名前も知られ貌も知られる様になるのは随分手荒へ仕事もしたが夫は後日の話として置手前に聞かせる事がある外でもねへが昨日の暮方例の通り馬車の掃除夫より馬場を一廻りして思はず奥の庭先へ出たが折柄向の座敷の内話の聲は乳母のお豊此奴は何でも訝な様子を目星とつけて小座忍び密と検査をして呉たのは先づ概略が斯云ふ仔細サお姫様も茶人に見ゆて何處の者だか素生は勿論名前も分らぬ一個の男を何處でお見初なすつたとか夫から後と云ものは夜も碌々寐就れず男の事を思ひ話して今頃うのふら／＼病ひ其とは知らず手前は此節顔の色が悪いと言ひ例の自分の自慢から大層苦勞にして居たが病氣の素生は戀の病ひ斯う分つたらモシ梅公手前も大概安心しなと鹽交りに話すと聞き如何して安心されるものか外の病氣なら知らねへけれど懸類ひとは強服物だ松藏俺れにい

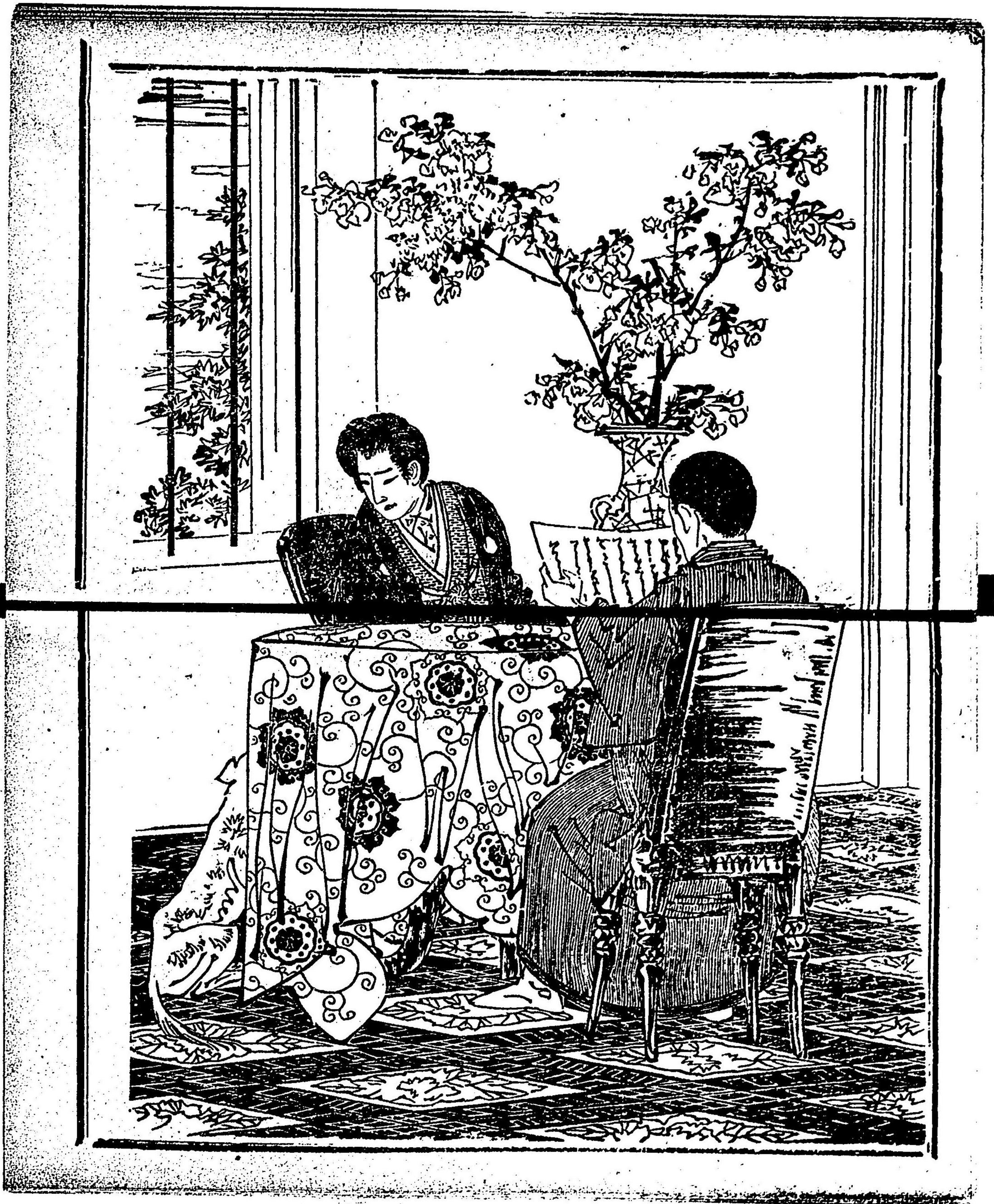
第四回

智慧を貸せオット其邊は胸の機關コウ梅公耳を貸など私語示す其折から上り口に  
て女中の聲々モシ御立でございませ直に御上が御立よなりませ

壁破れ柱傾ふきて見るも果敢なき白屋の家根の上よは鬼鷲の淵がうへにも憂々つ  
り背後は竹の藪疊隣の家々へ二三丁隔の籬も半は朽ち四邊に繁る夏草の人も隠る  
、までに生ひ夜は更され柴の戸に訪ひ来る人もあらざれば寂寥として虫の音の外  
音するものも更になし此所を何國と尋ねるよ此はこれみす、尙る信濃國小縣郡上田  
より程遠からぬ鏡臺山の麓に續く山間に年ごろより農業をもつて世を渉る野見龜  
藏となんいへる者の住み家なり主人は年頃五十路の上を六つ七つばかり越たるが慈  
恵いと深き性質なれば其身は貧しき活計をしながら飢ゝ頻る者ある時は必らず物  
をとらせ杯して之を救はずといふ絆なし且又田夫よ似氣なくして讀書ことを好み  
つ、幼少時より些の教を人に受たれば市街に出る度毎に新聞紙なども買もて來り  
閑暇ある時に之を開み世の狀態を知るとを此上なき娛樂とぞなむにける時に主人

藏は圍爐裡の傍に坐を占て一通の手紙を採ひろげ娘お雪よ手洋燈を持せて最もなが  
くしき其の文言を讀了り手紙の端に巻込であり、券面をばれ雪に渡し眼鏡はづし  
て言ひけるは「其爲替は東京へ修行に出たる時介が學問の暇よ西洋の書を譯して書  
林へ鬻き僅かに得たる財なれど身儘勝手よ費ひもせず妹の和女や此の私が定めし難  
澁勝ならん小費錢の補助にせよと手紙を添て遣したるもの先刻和女が出た留守に偶々  
斯くて届いたかお雪和女も能く聞さやれ彼時介は七八歳の時から書く業讀む事か至  
つて好であつたゆへお寺へ頼んで稽古道と少しも世話を焼さずに出精怠りな  
かりしが下世話よもいふ好ころ上手段々と上達して泰世の讀本もれろかろ一人で讀  
む程修業をさせたら天晴の學者よならうと師匠も言へ又本人は猶のことにて是非に  
と願ふも許さず若しも此の儘置たなら成長の後此の親を恨もせんかどこれを許し  
跡はかよわい老の身で不自由がちどの知つとも思ひ切て東京へ出したは彼兒が十五  
の年今猶や修業の最中よて他人の家には倚りて居れど學問の道よおいては少しも油  
斷をせぬとやら此の手紙にも錦を着ねば故郷の土を踏むまじと書て越した健氣な奴





苦しの中に三人の子の生立を苦に病みて敢果なくなつた女房も草葉、影で喜て居らん夫に引替惣領の浪太郎は困つたもの忘れもせぬ六年前五月中旬の事であつたが太郎作殿の阿轉婆娘お品と事情ある交となり揚句の果に通亡した跡で困るは此の親爺ツイに一度も人様に笑はれもせぬ潔白な跡に指をさへせたも皆な那奴が不所存から其後偶々戻つて來ても矢張性根は改まらず三十近い身を持って酒や賭博やの其外よは是ぞと言ふべき藝もなく又智恵もない眞の山猿ののち聞は太郎作どの、娘は皆くれ踪跡知れず兎角するうち兄息子の松藏さへも家出して戻つて來ぬと苦勞してか両親共に世と去りて到々家も絶へ果てたお雪汝は随分とも仕業を勵みて彼の様な可憐い人とはなるまいぞと最叮嚀に言諭す老の諄言身染みて跡居るお雪の方には先の程より停立て家内の様子を窺ひ居たる一人の漢の何やらん獨り黙頭卵の木垣聞くと知らねばね雪父子は猶も談話し時を移しぬ

第五回

水入すれ雪に片腰揉せつゝ浮世雑談に餘念もなき折柄門下佇立し一人先總暖簾の間より首さし入れてさし覗くを夫と見るよりお雪は立出で「誰かと思へば兄さんかなぜ其様に訝しな真似してサア」お這入なさいました常時と變らぬ妹が嗣に浪太郎の首を搔き「毎度お前に詫言をして貰つてのみ居たなれと云へお雪安心して呉れ今日といふ今日弗つりと改心した故是からはモウ心配は懸ないといひつゝ内へ入來るを龜藏は見て腹立顔「改心した」どお主の詫も久しいもの何時まで世話を焼せるか困つた奴と頼に皺浪太郎は打萎れつゝ「コレ親爺さん聞いてくれそんなよれ前が氣を揉でお呉なさるを是までは苟且よして居たなれと今朝隣村の伯父御をせびつて諸財を借うと思ひの外逆捻に遣込まれ嘔で嘔める意見の節々これで心が直らせば向後我家へは足踏させぬと斷然言れた其時に成程己が悪かつたと初めて心裏に悟つてみれば是迄段段盡した悪専心の鬼が身を賣て下げた頭もあがらぬ程極りが悪くて居堪されず早々外へ飛出して直其足で朋輩の處へいつて是々と打明話しをした所ろこの内のお母がそれは罷うころ改心した其心庭を見るならば龜藏どのも何やふよか

嬉しく思ひなされるだらうと言へば前も是まで身に持崩した人なれば切て親御が  
安心をなされる様は何なりと堅氣に成た一ツの規模を立ねば心中が分るまい夫を  
るには差當り多額の資本も要らぬ故上田の町より小間物類を買出て来て此の近任を  
廻つたならば薄くも利益のない事は有りませう然して身上を固めた上家へ歸ると  
するがよいと親身も及ばぬ異見の詞己もぞつこん其氣になり明日とは言す直上田  
へ往て来る積り併し親身の中でさへ見棄られたる疫病神俄か改心したと言つても  
人様が然かどて相談の敲手に成て下さらう譯はない殊も今更言出すのも面目もない  
次第なれど親子の縁の離れるか己が出世の手筈になるか二つに一つの所ゆる縁切金  
に遣たと思ひ資本を貸ては下さらぬか情々自分で自分の身よ愛想が盡た程なればお  
前の腹の立とも漸ど心が着ました生れて初めて堅氣になる資本の金ゆゑに父さん貸  
て遣て下さいませト兩の眼に涙を泛へ誠實嘘言うち交て語りつ詫つ只管悔悟の狀  
を見するにぞ不具なる子の可愛ゆきは凡ての親の心とていま改心と聞からう争でか  
之を疑ふべの忽ち怒りの色を消して「それには違ひのない事なら幸ひ昨日東京から時

介が越して呉た大事な金が此に十圓これを資本に貸ても遣らうが其の志ざしは何時  
までも「なんの忘れてなりませう是迄永らく御苦勞を掛た代りよ是からは私しが活  
計を立てて時介にも安心させお雪も樂にして遣ますといふに嬉しく鑑鏡はお雪に  
財を出させて浪太郎に打渡せば氣の毒さうに受け取りて「そんなら父さん此の金と  
「家の爲になる事なら遠慮に及ばぬ持て行け「難有う御座ます是でこそ己の身も立  
善は急げと申しませゆゑ夫ぢやア直に上田へ行て趣向を付けて参りませうといひつ  
、財を懐へ入相近き誰彼れ時門を立出で荒雨と彼浪太郎は舌を吐つ、何處とも  
なく出行きけり

第六回

から衣さつ、馴にしつまじあればはるくさぬる旅をしと思ふと在五中將の詠じけ  
ん其の燕子花よはあらねど儼似たる苜蓿草ひさぞ煩ふ池の上に架渡したる八橋は参  
河の國の名所をこゝに寫せし一名區その名も高き隅田の東堀切よ開きし舖、眺もひ  
ろき武藏屋とて座敷は便室奥表輕淨房四阿腰掛まで雄狹たる人の數貴賤上下の差別

なく袖をつらね袂をまじへ己が随意入り来るうちに一層目立し粉粧は彼の何れの家  
の武定君令妹輝子を伴ひて日比わりなく暗ひ給ふ今春の藝妓品吉を後より従がへあ  
ちこちと蜘蛛手に敲る、八橋を彼方此方と歩みつゝ花のいろくうち見遣りて輝  
子も了得結ばれし心の漫ろに解けしにや五月雨に池の眞鷹の水越てなき口吟みつゝ  
行く折しも其間さへ遠からぬ彼方の岸へ何やらん打忍びて唐詩を面しろげよ吟する  
者あり且見れば身は垢つさて賤が綜造り織たちの跡さへ知れぬ單衣に短袴を裾  
高一穿ち麥藁帽子の古びたるを右手に提たる少年の友など待つゝ居るよやわらん立  
も得去らぬみけり其の容貌をいかにと言ふ年紀十八九よて色白く鼻隆く顔は宛な  
がら白梅の露を含めるごとくにて眼冷しく眉秀で丹花の口唇蘇舌を包み自然と微笑  
を帯たるは實に天性の好男子威れどしかも猛からぬ其の風俗こそ往昔の小確命  
が八十鳥に近づき給ひし、黛も斯や在りけんと我知らず輝子は持し洋傘を押かたふ  
けて潜やかゝ彼方を情々見給ふ此は奈何に是予これ正しく過ぐる花見の日築琳の  
外へ行立て驚なくも思ひとめ忘れん方なき其人に驚る、べくもなきものから何處の

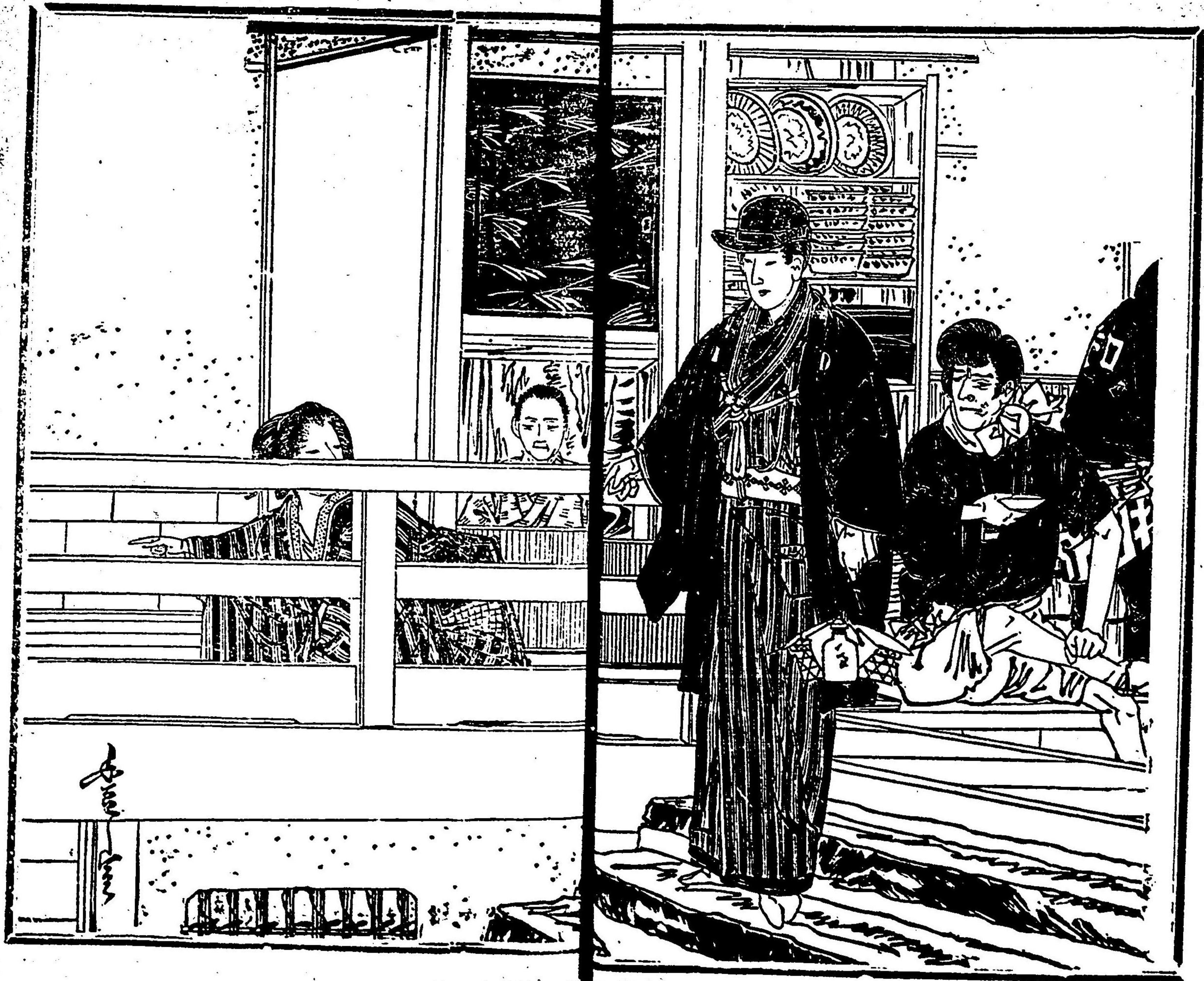
誰どしかすがよ問寄る術もあらざれば逢見るとは得ながらも互みに知らぬ思ひ川湖  
て紀念となる草の仇なる名殘となりなんかと只管胸を腦まじ玉ふ落花正に情あり流  
水豈意なからんやその素振の尋常ならぬに件の書生も訝かりて見るとはなしに此方  
を見れば姫は了得ようち恥かしく雪に紅さす其貌、満池の花も是が爲め色を失ふバ  
かりなれば木石ならぬ有情の男子心時めき氣動さて頼りよ此方を見願りつゝ端なく  
顔を見合せては眼元よ着き二人の素振夫と見て取る朋友は交眼袖ひさうち笑ひ「オ  
イ野見君モウ往ら」こは失敬ト挨拶さへそこくよして出て行く影を見送る品吉は  
何やらん心に點頭伸上り猶見送り給ふ輝子を隔て例の笑顔「姫様何と美しいアノ首  
浦はど打紛らかしけり

第七回

萬治の昔し遊客が山谷通ひの丹前姿は姫が池に影を止めぬを由緒は、も編笠茶屋の  
麻氣ながらも稱へよ残れる淺草の馬道邊古く老舗の甲子屋が跡よ築き高樓に金龍  
樓と人も知る手輕を旨の田川屋にて三層の奥坐敷に三人一座の書生連帽子に挿し花

苜蒲の色も着き堀切歸り、一盃の飲む酒の早や十分、酔の廻り話も自然と高くなる中に二人の西國訛り「僕は毎年堀切の苜蒲は缺さず見に行くが今日は咲揃つた宜時の始めてだ」「イヤ我輩はうの花などは餘り感服仕つらぬが其代りに揚貴妃小町も三舎を避る美人を見た那れは儘かに番町邊の華族の娘であるとの噂我輩如き此の人品では幾等想つて見ても無益が見たばかりでも先結構として其處で馳走は時介君だせ」「如何も神崎君の着眼通り野見君は那の婦人、餘程氣がある様子で有たか婦人の方でも來て居る様子で夢中になつて見惚て居た」「イ日色男三國一お蒲山とい話してあると野見が脊中をポンと打けば、報らむ顔を笑ひに打粉らし「神崎君や江口君が得意の辨で人を煽動て西洋料理でも騷らせやうと左う甘々とは其手に乗らぬと口には早く言粉らせども心裏は二人の言に違はず今日測らず堀切で見た乙女の思ひに心に山々堵ころ二人は我心中を言當られし苦しさを、噫我ながら鈍まじしと思へば最を面なくて酒の酔さへ一時醒め脊に冷汗を流して居にけるも此の野見時介とい人を如何なる者と尋ねるにこれなん第四回記し置たる信濃の

國小縣郡の農民野見龜藏が次男にて下賤の身は似も遣らず幼稚より學問を好み成人に隨ひて其志操いよ／＼堅く十五の年に郷土を辭して此の東京へは來しものなるが素より貧家の見なるがゆゑにその學資として非ざるものから或時は外國人の許に養はれ又或時は學者の家に就き奴僕同様の業を取りつ、其の暇を以て學問を心掛けあらゆる書籍と眼を曝し、電勉酷苦なせしかば其功積で今は早や事能を窮め物理に通じ自づと人に尊敬されるれと敢て驕誇色とてはなく常々克く其獨を慎み又た克く憂世の心を懐き今も己れ學業成りなば世に出身で、事業を立てなん兎やせん斯やと世の事に付け思ふ心のいと切なるにぞ現時は神田小川町なる或る政事家の許に從かひ譯書杯して書舖に鬻ぎ其財をもて雜費に充れば日々の用は差遣ひなく又或時は其餘金を郷里の父が許に送り其の生計をさへ助くる程にて勤勉おさ／＼怠るとなし然るよ今日しも常日ごろより裏なく交はる二人の友垣江口神崎の二名に誘われ偶と堀切の苜蒲へ行て彼の何某家の姫君を見しより偶々仇なる心、動きたりし了得堅固の少年なれば日を経るまゝに思ひかへて纏ては斯る浮きたる心も忘る、如くなり



Shin-ichi

第八回

けるどぞ

借も華族何がい家ハ馭者梅吉は馬丁の松藏と腹を合せ主家を我儘にせん所存にて密かに較計を廻らし彼の松藏が妹なる金春の藝妓品吉が武定の寵を承るを幸ひ彼に毒を吹込で先づ武定の精神を蕩かす夫より夫へ順を経て遂に一家財を奪ふべき計略其圖を外さずして事大半は整ひたれと豫て思ひし梅吉は君を兎や角と思へど容易に其事の仕課せらるゝにあらざれば日夜工夫を凝せども能き分別もなきものから心頭りに急燥て兎やせまじ斯くやせまじと思ふほど益々募る心の火むら只わこがれて今は早や姫の姿を見ること叶はずとも責めてはろの御聲なりともと吾を忘れて奥深く歩む廊下をさしらせて人よや咎められんかど前後左右に氣を配り輝子が子房の邊り近くへ窃歩しつゝ忍び寄り内の動靜を窺ふに折節姫は在らざして柱時計の滴たる音のみ最微かに聞えければ噫いまくしと暖やさながら立去らんとする其折節彼處の障子の隙間より輝子が日ごろ寵愛して姑しも座側をはなさるる手飼の洋犬婦人の艶

第九回

書と覺しき手紙の端を引咬へ出來りしを手に把上げ何心なく讀下せばこれなん輝子か日ごろしも焦るゝ戀人の 某に昨日測ら老堀切にて逢見たるのみならず其の姓名をも聞得しかば悦ばしきと限りなく家へ歸りし乳母のお豊と相談の上今日その住所を探るも難かしきにあらざるべしさらばさるるべき詔書認め置こそ宜けれと願ひまじきを頼みて斯は物したる輝子が自筆の詔書なりされば梅吉探返し見て餘念なく讀居りしがその妹まじさ遣方なく少時は怒氣を含みて居つさて彼ハ元來奸智の曲者なれば何か心は黙頭て忽ちハタと打微笑み件の手紙を懐中して疾くも彼處を立去りぬ金春板新道の中央に萬屋品吉と記せし延喜提灯を軒釣し一寸小意氣な藝妓屋の門口より一個の男格子戸ガラリと押開て「ハイ御免なせへと言乍ら突と道入るを品吉が一誰様ト言つ、隔ての障子今來し男の顔を見てハツと計りし駭くを尻目に見つ、件の男「お品驚ろくとはい無いと火鉢の前より大胡座わたり隘呂々々睥睨したる抑も此の男は何者か次回に審しく説解くべし

其時品吉は心の中に思ふ様此奴還昂ては面倒なり品能く言ふて返すゝ如きと俄かに反さぬ世辭愛想「波さんお前もお健康で眞實にマアお目出度東京へは何時お出づ」餘より目出度もねへ此間まで親爺の膳をかちつて在所居たなれと持たが病ひの博奕と酒生れ替つて来る迄は何思ふても廢られねば軍士の腐れ東京へと思ふ折柄親爺の手許偶さか出来たる金のあつたを親の物は子の物とらまゝ欺して悉皆捲上げ夫を路費よ其夜の中先づ在所をば出立なり早々此方へ來は來たなれと思錢身よ着せといふ例の如く來ると間もなく仲間に逢繼か一夜の賭博よまんま首尾好く敗北なして皆無に取られ元の木阿彌今日此頃では一滴の酒さへ飲ぬ哀れな境界何か儲かる算段をと思つて邪處此處ふらつくうち聞けばお主が金春よ藝妓になつて居るとの障此奴何より耳奇なりと尋ねて來たもお主の戀は斯して顔を合せて見れば滿血見捨てたものでもあるぬ今日から元の亭主に持て何卒買をして呉なト言は眞の口先許り實は離縁の金を取る氣と知れど品吉伴狂「折角訪ねて來て下すつたれ志ざしは嬉しいがお前に別れた其後は言に言れぬ艱難辛苦これも矢張兩親よ折磨を掛た不孝

の罪と其時思ひ當つた故に夫から以來は心を改め今では斯して浮氣らしい稼業はしても心は律義色の戀のといふ事は弗つり絶て姦婦暮し營業の都合もあれべ向後お前も丁箇して必ず此家へ來てはお呉でないよト斯う向付よ言ふてはないが可成迷慮をして貰いたい今ではお前も昔ほど變り別にお困りでもあるまいがト言つゝ火鉢の斗抽より幾等かの紙幣を取り出し紙を包んで前に置きこれは誠に寡いけれどホンの妾の志ざしゆゑ何處かで一杯遣てお呉ト言へど此方見向も遣らす物貨ひぢやア有るまい「突出すものなら突出すやう二百か二百か纏まつた財を此方へ越すがいいト絶まで不法の強談にさへ恠どもさざる悪婦の品吉煙草の烟を輪に吹ながら「夫な威迫に駭いて恐怖倉皇する様な女だと汝は思つてお出か知らねと眞に分らぬ唐榎木折角昔「の馴染甲斐深切づくで惠んだ財をヤレ不足だの入用のご増長よとを云なさんなト言ふに波太は勃然と焦上ち「唐榎木とはろりや誰の事今一言さう吐して見よ「いつたが何した「オオ斯するど圍敢荒く在合ふ煙管をおつ取持つて既よ斯よと見ぬた折しも「ヤレ俟たりと内より聲かけ一間を出るは別人ならせこれ品吉が眞の兄被



の某家の馬丁を勤むる愚漢の松藏なり

第十回

一室の中より松藏が少時俟たせ盛を掛け出来りしに浪太郎も別よ己れが理あるに非ねば姑らく忿怒を押し沈め其所へ坐れば松藏の先づ浪太郎に打對ひ己が斯して出て来たよは些と仔細のあるとゆゑ何であらうと氣を靜めて己がいふ事聞なせへと云ふを品吉打消して「兄さん箇様分らない人よ構つて居た日よは何な熱を吹かうも知れねば滅多な口をお利きでないト止るを松藏聞取へす「コレ品吉何したもれた主の口が出遇る故に兎角よ話が煩雜之い暫らくお前は黙言て居ろト目顔で夫と知せつ、「先刻よ暫然と見た其時から此の様子なら咄せる仲間と己が竊かに睨んで置たも些か事情ある此方の方寸疾から企んで居る狂言に役者が一人不足ゆゑ是から一座へ加はりてヤンヤと言せる處まで其狂言を勤める氣ならば莫大儲かる奇妙な仕事、乗せて遣るまいものでもないが何と卿は乘る氣はないか若し相談に乗る氣があるなら此處で斯な詰らねへ内輪喧嘩をするにも及ばせ互ひに甘く行事ト誘ひる詞に浪太郎「何な

話しか知らないが己れを見込で依囁とあれば此方も男兒頼まれもせう其相談とは如何いふ事か其奴を早く聞しなせへと言ふよ松藏打悦びて「夫ぢやア謂て聞せやう卿は知つてをるまいけれどこの松藏が現時の身の上番町邊で人も知つたる華族の家の馬丁奉公相手の馭者に梅吉と言ひ名前ばかりは優い愚漢其奴と俺が心を協して主家の財産をば皆掻き込んで我物にせる豫ての陰謀妹れ品を其の狂言の立旦として主人を蕩し十が九つ仕途せられど其幕際へ圖らずも卿が斯して飛込だのを幸ひにして後段の趣向た品お前も合點したかと橋を架ければお品は進み「成程初手は氣が附んだが爾聞て見ればお前の腹悉皆合點が往ましたゆゑ是から妾しが話しをします今年五月の事であつたが其のお邸のお姫様が鬱悒の症とて鬱いて居るのを氣晴しのため堀切見物一途に行けと御前の仰よ妾もお供をして行きましたがるの時姫が途中にて偶と見染し一人の書生同伴なる男がその名を呼ぶよて能くく見れば其の人こそ日ごろ妾も見知り越しなるお前の弟時介さんトいふを松藏又側より「其處で熟々思索をするに其奴を一番玉よ使ひ斯うもしたなら早や急速と所置と付うと思つ



た故よと半分言ひさし形勢を見れば浪太は頷りに小膝を進め「コリヤ面白し其の跡話せど猶も密話し時を移しぬ

第十一回

秋來ぬと目にさわやかに見えねども風の音にぞ驚ろかれぬる其初秋の風戦々文月半旬のとなるが野見時介は去り難き所用のありて宿所を出兩國邊へ赴きつ黄昏よ及びて漸々に其の所用を果せしかば率や是れより歸らんと我家へ急ぐ途中にて腕車を雇ひ乗たるが間もなく宿所に着たれば車を下りて賃金を渡さんものと錢囊の中へ手先を差入るれば氣轉を利して車夫が「モン明りをと言ながら持たる提灯差出して時介の顔見るよりもヤア卿は弟の時介トいふに此方も驚きて車夫の顔を見れば笑ぞ圖らん我兄の浪太郎にてありければ「サウ言ふ卿は兄上か先日家より越した手紙に貴兄は在所にね出なさらぬとあらわら報して越しましたか夫なら全く東京へお出なすつたので御在ましたかと問れて浪太は頭を掻「爾聞れては此の兄は面目次第もない事だが是には段々仔細もありと語り出るを押し止め「定めし夫よは種々の深い仔細もと

ごりませうか何を申すも此處は往還委しい譯はゆつくりと内へ還入て聞ませう私しの家ではなけれと何も遠慮は御坐りませんサア此方へと先立ち案内すれば浪太郎は豫て松藏品吉等より頼まれて居る一件に手を下さるべき端緒を今ころ得たれと思ふにぞ悦ばしき事限りなく時介が後で随ひ其家の内へ這入りつゝ足を洗ふて座敷へ上り夫より時介が居間へ通して先一通りの挨拶も済むるが時介は不審晴れぬに漸に膝を進め「先刻も一寸話した通り先日親父が越した手紙に日外私を送つて上十圓の金子を阿兄が是から心を改め堅氣な商賣を始めるから資本に借せと俵いつて持て出たま、踪蹟知れず誠に當惑えて居ると態々報知でありましたかまさか貴卿か其様な悪事をなさらう筈もなし是よは何ぞ入譯があつての事と存じましたか一体何云ふ間違から起つた事でありませうかと了得夫とは直接に言もされねば餘所ながら物知らかよ訪ぬるを此方は豫て期したる事ゆゑ故と恥たる面持にて「夫は親爺が立腹紛れを書て越した手紙ゆゑ只一概に欺したと仰山らしく言たであらうが夫は全く此の兄に退に退れぬ義理あつて財を他人に遣らねばならぬ據ない事情ありて眞の一時の方便

「親爺の前を言持へ彼の金子と借たと言まで些細の話であるけれど假も親を欺むいた罪は何道通れねば卿に逢て夫等の事を尋ねられたら如何言はふと實は苦勞して居たる己の心も推量して此後とても見放さず何卒力よなつて呉れト眞實しやかに物語れば時介最と憫然に思ひ「何も夫な私しへれ心遣ひに及びませう成うとやら私しも手許でお世話が致したけれど自分の家と事變り夫も叶はぬ貧書生併し斯して東京に永らく出て居る其甲斐には随分歴々の人達に懇意な方も御座りませれば是から私しが差上る些少宛の費額でお済みなさる其内よは其人達へ依頼して卿のお身の立行やうに方向を附て上ませう必ず御苦勞遊ばさるなト勞はる弟が深切を聞つゝ浪太は心の中は仕済したりと思ひながらさあわらぬ体よ持做つゝ猶も話しし時を移しぬ

第十二回

花に暮し月も明し酒池の遊びは他愛なき主君武定君の何時とても始終館に在さねば自然と家政衰へて門に建たる瓦斯燈の光りも昏き何がし家の耳門を叩開きて今しも

内へ入る者は夜陰を照らと提灯の形も著き人力車夫此はこれ落戸の浪太なり頼て立關の方より至り密かゝ動靜を窺ひて「お頼み申すと呼入るゝ聲に應じて立出る取次役の何某が何所からぞと尋ぬるゝ浪太は小腰を屈りつゝ「卒爾ながら此方縁にお豊さんと仰しやるれ方がお出なさるで御座ませうが私し事は小川町の野見様から雇はれて参つたもので御座りませと一寸お傳へ下さいまし「早即知らせ上様から暫時こゝにも言捨て奥の方へと立て行く跡打眺め浪太郎の懐中より一封の手紙を出して得意顔一ア、してれ豊を呼出して此の偽書を渡す時は梅公から宜様よ吹込んである筈なればお豊は夫と心得て此偽書を輝子よ見せ是から直にと勘むると日頃焦れて居る男ゆゑ積る話しをするどある其の言の葉に絆されて夫なら乳母も一伴にと行く氣になるは定の事此奴は何やら狂言が纏まりさうに成て来た夫に就ても那の時介伶俐な様でも弟丈兄の智恵には勝ぬと見ゆる此の手紙とは時介に書て貰はう許かりに久しい後から爲すとも宜い車夫になり捜すうちフト兩國で見懸たゆゑ無理に勤めて車に乗せ那奴の宿所まで送つて往た其時始めて弟と知つた振にて名無あひ今では

沈着し車を挽く居る位といふ處を山に見せかけ何處までも那奴の心に通へて盛今日又往て梅吉から預かつて居た玉章を出し實は是々の傳手より依り番町邊の華族邸宅へ出入をするうち其處の内の姫様が日外卿を掘切でその品吉が咄いた通り言て聞せし姫様の乳母どんから其のれ方が卿の弟であるならば日毎と重る氣鬱の病救うて貰つて進げて呉と退引ならぬ頼みゆゑ己の顔をば立ると思ひ嫌でもあらうが是非今夜逢申して思ふ通り御意見を申さうとも何とも程好く遣つて呉れど眞實じやかよ欺むいたれば元より純粹な彼の時介此方の頼みを眞に受けて替て越した此の返書かねて脚色んぶ狂言の玉に使ふと夢にも知らず定めて白痴を見るだらう其様事はトマの川お豊は一体如何したかと早く出て来て呉れば宜にアなれつたい事だなアと暫は腕をば組み居たりけり

第十三回

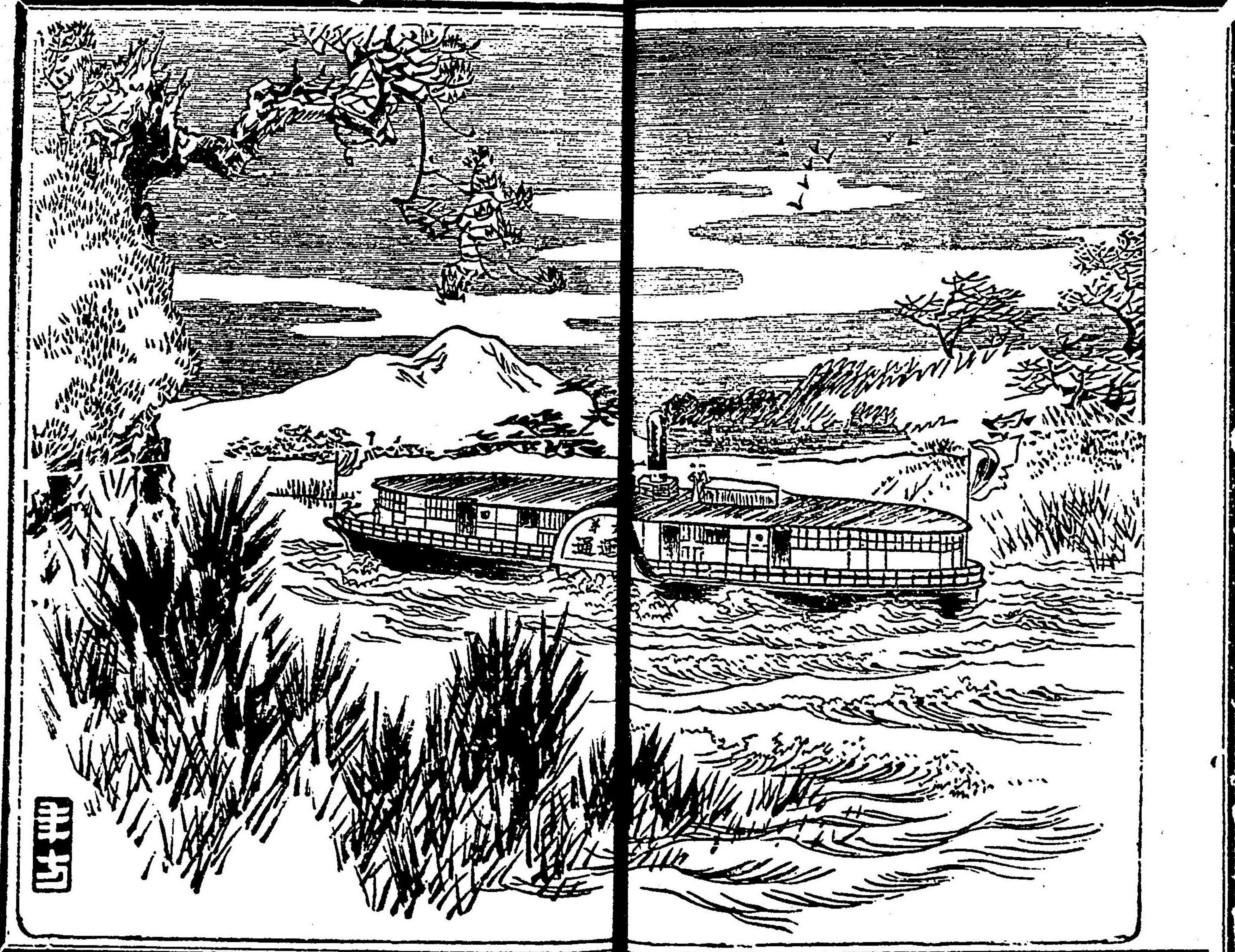
秋の夜の月はあれども雲間に入りて戰吹風も物凄き茲一名に負ふ九段坂はや初夜近く鳴鐘に往來の人も跡を絶ち寂真とせし折柄車轍さしらして此處へ挽來る車夫

が何か心に點頭て忽ち其處へ梶を下し車の上なる婦人に對ひ「サア〜來りやしたぜト言つ、梶を引捲れば二人の婦人は愕々し「豊や此處の九段じやないか」ハイ合點が參りませぬ是は定めし車夫が心得違ひて御座いませうト半言せず冷笑ひ「れ前の何にも知るまいがコウしてれ主の其の阿魔を此處へソックリ連出したも野見が待てる料理屋へ連れて行とは眞赤な偽はり實は疾から其の阿魔に惚貫て居る男から頼みを受けてする所業是から其奴の處へ連行さ今宵一夜はしつぱりと抱れて寐さそ胸算だが此處まで來れば此方の質物幾等泣いても叫いてもコウ協はない乳母どんお前用の無い幹軀是から勝手に歸るが宜いト較計の底を打明とにれ豊は戰栗胸震ひ「爾云ふ事とは露知らず姫様の戀を叶へんと思ふばかりと密ろりとお供をしたの妾の失策お主にお怪我おらせては何も妾が濟ませぬ情と思ふて車夫さん何卒救して下さりませト泣詫れども聞入らず車の上より一輪み震へわな〜く輝子の口へ手早く欲す積鬱情容赦もあらく〜しく小脇抱へて通行くを「爾はさせし乳母お豊浪太の足より取纏り狂氣の如くもたゆるを「エ、面倒なト浪太郎立踴、丁と蹴飛ばせば須臾も堪らず仰

様に地上へ墮と倒る、時脾腹を石にて強くうちウツと計り、悶絶するを見向も遣り  
ず一散に驚の嵐は羽を挿如く駈走り行く其間半町ばかり距離し折柄跡へ來かゝる一  
個の少年臨るに照す月影に彼方を屹と打見遣り驚ろく間、浪太郎は早くも影を隠し  
けり、こゝは市ヶ谷佐内坂怪しの家の軒下よ一ト息吃と繼ながら抱へし女を静かに  
下し「阿姉や一寸開て呉なト門の戸はどく打敲けば年増の婦人と覺しきか「浪さ  
ん歸つて來たのかへ今開るからお待よトいひつゝ内より掛金はづし破戸をガタビヤ  
引開て「玉は首尾能手に入たかへト低聲云ひて戸外を覗き輝子の姿を見るよりも  
俄に作る猫撫聲「こなたが噂の姫様か能こそお出遊はしたサア此方へト手を把て内  
へ入るれば浪太郎門の戸締て座敷へわがり輝子に袈せし猿轡の手拭はづす其中に又  
もや奥より忽然と立顯はる、一個の男是ぞ此身を勾引さんと謀りと思淡なるべしと  
思へば最も恐ろしく顔も得上す泣伏をを件の男は打見遣り莞爾と笑ひて「輝子さま  
定めし悔り遊ばしたらうト言ふに思はせ顔を上げ「ヤア卿は御邸の梅吉と呆れて辭  
もなかりけり

第十四回

我は仇なす其人は何者なるかと思ひしに現在家來の梅吉なれば輝子は如何なる事  
かど不審晴れば身も震へ心も消る計りなる哀れを餘所に梅吉は泣入る輝子を引立  
て二階へ上り明りを燈し隔亮をハツと立切れば中には輝子と只二人傍りに忌憚るも  
のなければモウ此上はいと易しと獨りはくく「打點頭「イヤコレ姫様卿さまは飛だ  
憂目にお逢なすつて嚙御難義でありましたらうが俺がお目も懸つた上は何も怖く  
は御坐まヤん斯して此處へ引出したもみんな俺しが貴女へ心中イヤモウ何も其様よ  
吃驚するには及びません疾から貴女に惚ては居れと向ふは主なり此方は家來殊に屋  
敷は人目が多く滅多に近寄る事さへならねば此いつは何でも尋常な事ではゆかねど  
心の當惑いろく工夫を廻らすうち日外奥の縁側で不側に手よ入る一通の玉章はま  
ましく貴女の手跡野見さまゝあるとあるを見て此奴は豫て噂に聞く書生へお送りな  
さるのかあら妬まじやと思ふよ付け偶と泛んだ一ト趣向其野見とやらいふ書生は貴  
女も豫て御存じの金春の藝妓品吉が由緒の者といつたを幸ひ彼に頼んで一工夫と思



舟

ふ矢先へ折能くも書生の兄の浪太郎が昔し馴染を言立て品吉の處へ無心に來たど丁度其場へ居合した品吉の兄の松藏がこれ屈竟と同類に引入れ其奴書生の宿所を捜させ此の程夫が知れたので直に浪太へ俺が日外拾ふた貴女の艶書を渡して書生へ届けさせ又た向ふから其玉章の返事を書せて戻つたが則ち今宵貴女をば此處へ引出す術の道具夫を知らずに那の車夫の浪太が口よりうつかりとお乗なされた腕車をば即ち我等へ玉の輿酷い仕方と恨ます無理な様だが此のね願ひを何卒叶へて下さりましとしなだれ懸る面憎さ斯まで主を侮るかと思へば口借しは遣方なく勇ふる聲揮はし「エ、梅吉の人でなし日ごろ妾が病臥すまで思ひ焦る、野見さまへ言寄る便宜のあるならば其の媒介こそなすべきに却つて主へ憤懣慕戀路の邪魔をなすのみか主よ愛恥見せんとは言ふ様もなき人畜生見るもなか／＼思はしと身を措避て猶も又口惜涕泣伏せは此方は愈々氣を燥ち「優しく云へば増長り情をしらぬ強情阿魔さう悪口を向せなら此方も意地づく何の様に泣き叫いても往生づくめ抱て寐かして隨はせは娼妓に估て財にする手筈が疾から定めてあるのさ夫でも否應吐すのか豈夫

否ではあるまいがト言つて手を取り引寄せられ輝子は今や絶体絶命進れ片野の朝姓子鳴くより外もなかりけり

第十五回上

不忍の池の邊なる或る待合の奥座敷に武定君が深閑なる金春の藝妓品吉と今日も例の差對ひ品吉は何か心の中と思ふ仔細のありと見ぬ武定に酒を強て早や熟醉になりしを見て頼りし點頭ながら左あらぬ体よ「高うは言れぬ事なれど一昨日の晩姫様が乳母を連れて何處どかへお出掛になつた其途中で車夫どかに勾引され今にお踪跡が知れぬとやら鳥渡お咄しし伺ひましたが警察署でも分らぬか最う尋ね出して呉れさうなものですなへト素知らぬ体よ探ねるを聞て此方は打點頭「元より警察へ訴へて探索を遂る位なら人にも隠すよ及ばぬが若し此事が世間へ聞ゆる種々な浮評の立どさば第一家の瑕瑾といひ輝子が爲に、良からねば先内々に人を雇ひ諸方を詮索した上で探ね當らぬ其時は所詮力に及ばねば其期に至つて公沙汰するが上策なるべしと梅吉がいふも道理なれば家扶も其意に隨ひて他聞を憚かる處ゆる今の話しは此場さり



必ら老人に渡すなよト口留するを聞敢ず「夫は元より妾ハ能く吞込てかりませが  
借御不便なは輝子様荒い風をもお厭ひなさる脆強いれ身で悪者の手込にてもれ逢な  
されたらと夫許かりが悪念りでト云ふを武定れし止め「今も今とて云ふ通り他聞を  
憚かる輝子が事壁に耳ある世の習ひ聞人なしとも言はれねば外の話しにするが好い  
妹の難儀を餘所するも一家の憂を世の人よ知られぬ爲の己が遊興サア〜汝も過  
すが好いト言ふに品吉逆らりて「ハイと言つ、杯を三度か四度に一度宛受ては返し  
盛る酒に武定君は酔潰れ堪難きより其儘に品吉の膝と枕とどし頓てすやく高野息搖  
動かせせどころぐれど更に正体あらざれば仕済したりと品吉は片頬笑を合みながら  
床の間ある羽織の上の紫の帛紗包密と引解きて領づらつ、何か細小一品を手早  
く已れが帯に挟み帛紗包を又元の處へ直して武定の頭を密々と膝より下しさし足し  
て上此間を出で椽側傳ひ裏口の切戸へ近く歩み寄り背後をうつと顧視しながら咳  
をなしければ之を相圖に切戸より突と入来る松藏が是も前後を見廻して「妹首尾能  
くいつたかト云ふ此方は手をもて制し「野暮に大きな聲じやアないかコレ御覽とい

第十五回下

ひながら今しも座敷で盗みたる彼の一品品を帯より出し渡せば此方は受取て「甘く  
遣つたぜ夫ならお品「御前のお立よならない内に些ども早く梅さんへ「サ、合點と  
言捨て早くも此場を立去れば品吉は何喰ぬ顔再び座敷へ歸りけり

夫は借置爰又野見時介は先つ頃測ら逢逢し實の兄浪太が其後訪ねて来て那の何が  
し家の輝子が事を精しく語り輝子より托づかりたる絶書を出して是非とも一度れ目  
に懸り何どか程能く遣て呉ねば兄の顔が真れると餘儀なき依頼し詮方もなく然らば  
爾うと意を決し返書を認め兄に渡して返せし後初夜と覺しき頃ひに路寄をして出逢  
の場處へ赴むかんとて九段坂へさし懸りたる折しもあれ那の浪太郎が輝子を攫へ乳  
母のお豊を蹴倒して通行處へ出會ひければ何處の者か知らねども難儀を見捨る  
らすイテ追懸てト思ふ間曲者の影を見失ひ如何はせんと躊躇うち傍にお豊氣絶  
して伏居る状を見るよりも追捕を止て踏止まり種々介抱なせしかばお豊は頓蘇生  
り有たる事の体爲を詳さに語るを打聞て楮は此身も浪太郎に欺むかれいかと歎

兄の悪事に冷汗を流すばかりの思ひをせしが了得に夫と打明て言ふも中へ面伏なれば故と其身の姓名を包みて左右に別れしが夫より後と彼と斯と兄が身上と何が家の輝子が事を身一ツと思ひ兼つ、樂まを體々として居たりしが夫より三日許りを經て家長向某所用のありて麻布邊へ赴むしが既に其日も暮果て早や十二時に近ければ歸り來ざれば時介は例の通り今夜も又彼處に宿る事なるべしと下婢に此旨心得さすれば下婢は夜延を片附て晝の勞にすや〜と苦もなく寐入し夜半過表の門をほど〜叩きて「頼みますと呼者あるにぞ此時までも孤燈の下書と讀居たる時介は若しや主人の歸りしかと思へば自から立出て只今夫へと言ながら門の戸開て偷見るに月はあれどもやの闇く物の黒白も見念分ぬに提灯もなく只一人佇立て居る人影は主人にあらす婢娟たる十八九歳の女なるにぞ不審と思ひて且見斯見つ、「何處のお方と尋ぬる聲に「若くや卿は野見さんではございませんか、云ふ返答此方は益々訝かりて内へ遁入て燈火を照し見れば是こそ思ひ懸なき彼の輝子よてありけるにぞ夢かと計り打駭ろきて「貴女は日外堀切でお目に懸つた其後も種々ね噂を聞ました

第十六回

輝子様とやら仰しやるれ方此處へは如何して今時分といひつ、能く〜姿を見るよ髪が乱れて一重帯目も泣腫して居るその有様に何か心悟り体よて急に詞を改めて「お見受申せば私しも斯してお出になりました様子に就て聊かの心當りも御座りませ先兎も角も此方へ昇り容子を話しなさいませ、幸ひ今夜は主人も留守で遠慮な者は居りませんと云ふに輝子は稍安堵して嬉しげに會釋をなす時介が居間に誘はれしが斯あささしき姿にて見ゆるこの耻かしさよと了得あをなき未通氣の嬉しくも亦羞かしくいろ〜に思ひ乱れて暫時の顔も得上を居にけり

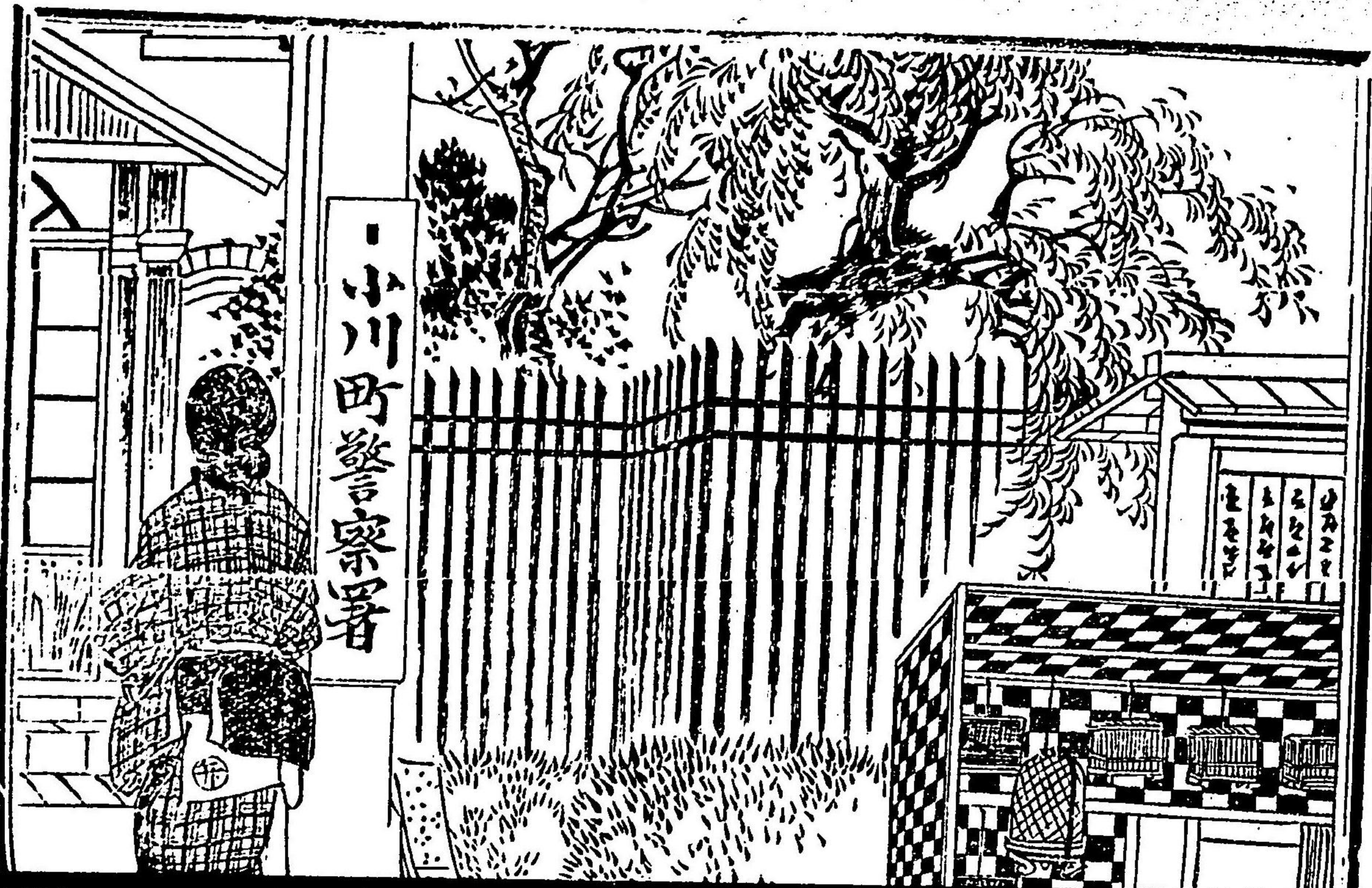
深窓の下に養はれ世間を知らぬ輝子なれば只恥かしさが先立て今更何と言出ん便宜もなくさし俯きて涙と咽ぶ情態を察し遣り先づ時介より言出けるは「只今鳥渡れ咄し申した貴女が今宵お越しのとその御容子に就さまして私にも心當りと申したは外でもないト是より過る夜九段坂にて浪太が輝子を匂引してお豊と氣絶せしめたる危急の場所に遭遇しが一足の違にて看す〜浪太を取遣し跡よてお豊と介抱ふして

事の顛末を聞たる本末遺漏なく語りて借云傑夫より後も貴女の事を思ひぬよてはな  
けれども別な詮方なき事なれば其儘にして居ましたが此の眞夜中に只一人斯して  
出よなつたを見れば那の夜悪漢に攫ひれて出になつた其先から虎口を遁れて漸々  
と此家へお尋ねなつた譯爾いふ事では御座せんか何なすつたので御在ますと問  
はれて漸々涙を拭ひ「さふ何も歎も御存じなればお咄し申すよ及ねど恥しながら貴  
君をばお見染申した其日より想ひに塞れ戀も焦れ争で言寄る傳手あらばと思ふ折柄  
測りなく貴君のお玉章を頂ひた其嬉しさに何事も思ひ斗る暇なく那の車夫を悪  
と知らずに彼に誘はれ女の身にて大膽も夜中に出たのが此身の不運と是より涙太  
く攫はれて佐内坂なる梅吉が姉の家に入れられ現在家來の梅吉に無体の戀を仕掛  
れ手込にされんとせし迄の事の仕末を物語り借その翌日から奥の一間に押込られ  
て出る事叶はせ今宵も再應梅吉が來て無体をいふかと思ひしに其夜からして梅吉は  
邸の用の多きにや絶て影だに見ぬされど梅吉の姉が何時とても傍に在て動ねば遣れ  
出べき邊聞もなく此は如何にして好らんと思ひ煩ふ其中は彼は毎夜の看護に倦てか

宵の口から火鉢に凭れ轉寐せしこそ幸いと漸々彼處を遁れ出直し邸へ皈らんと足  
向ては見れども借々思ひ廻らせば梅吉始め松藏等の非道な者が兄君のれ氣に適ひて  
何から何まで館の事を預かれれば妾が在らざる後又もや奈何なる較計を設け悪  
事をなすやも計られず夫にうか／＼歸らんは危き事の限りゆゑ誰かを頼みて寛々と  
事を計るゝ如なきと思へど今日親戚の人さへ皆兄君の身持を悪しみ過ぐるころより  
往來さへもなし給はねバ力どなら老然すれば所詮頼を依頼お絶り申して若し聞れず  
ば死ぬより外に手段もなしと胸を定めて途中より御迷惑をも顧みず此處へ尋ねて参  
りましたといひつゝ、又も泣出るろの心根は寂しながら時介は猶ほ不審な堪へず如何  
なしてか此家へは來しと暫し腕を組み居たりけり

第十七回

錦町邊の新路に地所又は家屋の賣買を營業となす山本とて此邊に名づたる兩替屋の  
店には手代小圓等が客の絶間の骨髄め欠師して居る處へ店頭へ腕車を下させつ羽織  
袴の客人がすつと這入りて會釋しつ店へ上るを見るよりも帳場 扣へ一番唄が飛で



出やら茶を酌やら待遇ふりの手厚さは能き客筋と見ゆにけり。雖も此の客人は肩紗包の中よりして數通の証書を取り出し「實は昨日申した通り此度御入用の金高は例と違ふて莫大なれど牛込のお蔵を抵當し書入たなら充分と思ふに違ふ當家の談し然りとて自分の一存に扱ふ事もならぬゆゑ一先歸りて其趣きを昨晚殿へ何ふたれば夫ら邸宅の地面を添へて密その事一萬圓だけ借る事として呉へと仰しやるゆゑ是なら豈夫當家にて異存を言はなざるまいと今日は証書を認めて印紙も貼て來ましたか如何な者で御座らうト云ふ番頭頭を低げ「先殿様の時分から御用を聞てをりまする手前方で御在ますれば少々の事は奈何様にも扱ふ胸算で御坐ますか昨日仰せられまいたの些と辛いと存じたゆゑ不本意ながらお斷りを申した譯で御在ます只今貴卿の仰しやる通りお邸宅の地面を加へて一萬圓どの仰せならば何の否哉を申しませう直に金子を手前の方から持せる事の致まをゆゑ其餘証書と引替にト云ふを此方は押止め「持せて越すは辱けないが彼是を問ふ今日の日が暮ては些と不都合かと思ふ仔細もある故に直に拙者が受取て歸る事に致しませう」左様なれば濟ませんか、言つゝ

立て奥に入り財を揃へて持出ければ此方は以前の証文を向ふへ渡して金受取り暇を啜て歸りけり「金春の藝妓品吉が家の一間に密々と密事を語らば悪漢毒婦」まんまど首尾能く一萬圓の手に遣入つたも品吉さん全くお前の骨折だといふに松藏口を開き「いかにも梅公の云ふ通り那の待合で且的に酒を絡めて寐かして霞き其の懐中の寶印を苦もなく盗んで已等と呼び密と渡したお手際はと「二人で思入れ煽動で置分前を少くするなんぞは餘まり下さらないト云ふ二人も吹出して思はせハ、ト三人が笑ひ喧めく折しもあれ門の戸手荒く押開て息急駈込む浪太郎「サア大變だ、トいふに三人顔見合せて「周章しい注進ぶが一体何が如何したのだト口を揃へ問返すにぞ浪太は汗を拭ながら「先刻阿姉の處へ往たら大切の玉が昨夜とやら那處を運げて邸へ歸りと云ふに松藏始として「輝子を邸宅へ歸しては此方の悪事の露顯の基と愈々色を失ひにけり

第十八回

信州上田の町はづれに立せ給へる佐保姫の社の木蔭に憩らひて道行人を眺めながら

烟草燻らす旅人あり四邊をうつと見廻しながら溜息ついて言様は「種々工夫を廻らして折角取得た大切な玉を阿姉の家に預けて置一方の仕事を仕上てから何處かへ連れて走らうと思ふた事が齟齬ひ何やら此方の身の上が危険なつた處から同類の奴も夫々に財を持って住所を轉させ此方は是から新潟へ高飛をせる考案で漸と此處まで落延たが那の玉をさへ通さずばこんな早く周章喰て逃出さいでも好かつたに思へば詰らぬ事をしたと昨日に變る身の上をうち嘆息つゝ居る折から遽かに人語喧まじきは何事なるかと往還へ歩み出て窺ふに行粧は最ぞ鄙びたれども温厚やかなる老人の美しくしき娘を連たるが四五人の非人に圍繞されて双手を土に突ながら「汝方が我が物を出してはれ上なるを娘が笑ふて通つたは不調法で御座ますが先刻にから此通り父子二個が手を下てお詫申して居りますれば何か是にて御勘辨を謝れと更し聞入れず「イヤイヤ是非とも其の娘を此方へ賞はに聞ぬのだ夫ども娘が可愛なら百か二百のお財を出して替りに是を云ふが宜い左もない内は其娘を歸す事はならぬのだ「夫は餘り無理と云ふものお見懸の通り様々しい老爺が何て其財を「持て

居ぬなら娘を買て財にするから爾思へナニめぞと泣るのか夫なら財を何故出さぬと嘲ける中に又一人が「愚圖々々するうち棒にでも見付られると面倒だから早く阿魔を引摺つて例の處まで行へかど云ふと皆々心附き「オ、夫よといひながら矢庭に娘の手をどらへ引持て行んず有様に噫やと計り老人が取戻さんと惱れども暗弱き老の力といひ殊に多勢の中なれば如何とも詮術なくほどく危く見おけるを彼の旅人は何思ひけん直に其場へ駈寄りてマアく俟たど止むるよ非人は眼を圓にし「ヤイく汝は何奴だ出過た事を仕やがるなどいふを此方は柳よ受け「如何にも出過た言分だが何と己等の挨拶で堪辨をしては呉まいか「斯見た處が身装といひ随分様子宜さうな出様に依たらノウウ何ハ「チ、サ勘辨せぬでもないが幾等出すと云ふのど口々云ふ其中に旅人は五圓の紙幣を出し「兎も角これでも云ふを聞是なら生中手荒い事をするには増だど各自が目配で知らす以心傳心「安いものだが仕方がないと跡は分らぬ減ぞ口いひく金を受取つて早くも彼處へ馳走りぬ

鏡臺山の麓に續て山間に住馴し彼時介が質親なる野見龜藏の家此程より世話になり居る旅人は別人ならず梅吉なるが身に罪惡のあるものと夢にも知ぬ龜藏なれば娘にも夫と云含め心を用ひて待遇けり抑も又龜藏が何故此の梅吉をかくまふか其の原因を尋ぬるは此はこれ曩日龜藏が娘をつれて上田の市街へ買物に行し歸るは非人共よいじめられて既娘を彼等の爲に勾引されんとせし時此の梅吉に助けられ不測の難を逃れしかばその禮心に龜藏が我家へ誘ひ來れるなり然るに梅吉が龜藏の難を救ひて得させしは實意あつての事はあらせ世を忍ぶ身の便宜に困り新瀉邊へ落延て身を隠さんと思ひたち此の信濃路へ來りしが又熱々と考ふれば是より新瀉へ行た處が是ぞと思ふ目的のあるといふも非ざれば夫より寧ろ此邊の片山里へ暫しのうち身を潜ませて熱氣の醒るを待ち東京に再び歸るゝ如じと了得故郷の懐かしさと思ひ直せし處から彼の龜藏が篤實なるを早くも悟りて故らに彼に恩をば被せけるなり斯て或夜の事なるが龜藏は梅吉に打向ひ「卿を連申した後まで染々と御身分を窺ひませんでありましたが斯しては宿申すのも何かの御縁で御座りませうゆゑ

いつくまで私しは及ばずながら力になる考へで御在ます既ては信濃路へも越になつたは如何なる譯でありませうか心得の爲め一通り話して聞せ下さいました他事なき詞に梅吉は尤なりと打點頭「身分をお頼みしながら東京を出た其譯をまだ辨解も申さねば御疑念あるは御道理當處へ參つた其譯を審しくお咄し申せました上身的方向の御相談も願ひたいと存じた處幸ひのお尋ねゆゑ匿ますお咄し申します元來私一は東京出生幼年の時から神田邊のある豪商の手代に住込み今年で丁度十八年永い間の奉公は辛棒しぬいた甲斐もなく據ろない交際で一二度吉原へ行りましたが主人へ悪く聞けたやら此程永の暇となり今更親へ顔向のならぬ處から我家へも歸らず新瀉表は母方の親類があるを頼みにし彼處へ往て一辛棒と血氣を任せて此處まで踏出したれと今となり又情々と考へれば夫も餘まり思はしくもなし夫故足が進まねば未だ遅々して居りますが如何したものでありませう好い分別があるならば仰しやつて見て下さいませし而して卿は序ながらお尋ね申して置ますが暇か卿のお名は龜藏さんと仰しやる様でありますが御姓は何と仰しやりますと問ふにお雪が傍より

「奈何も貴客の仰しやる通り爺さんの名は龜藏で姓氏は野見と申しますト聞て梅吉愕然と呆れて詞もなかりけり

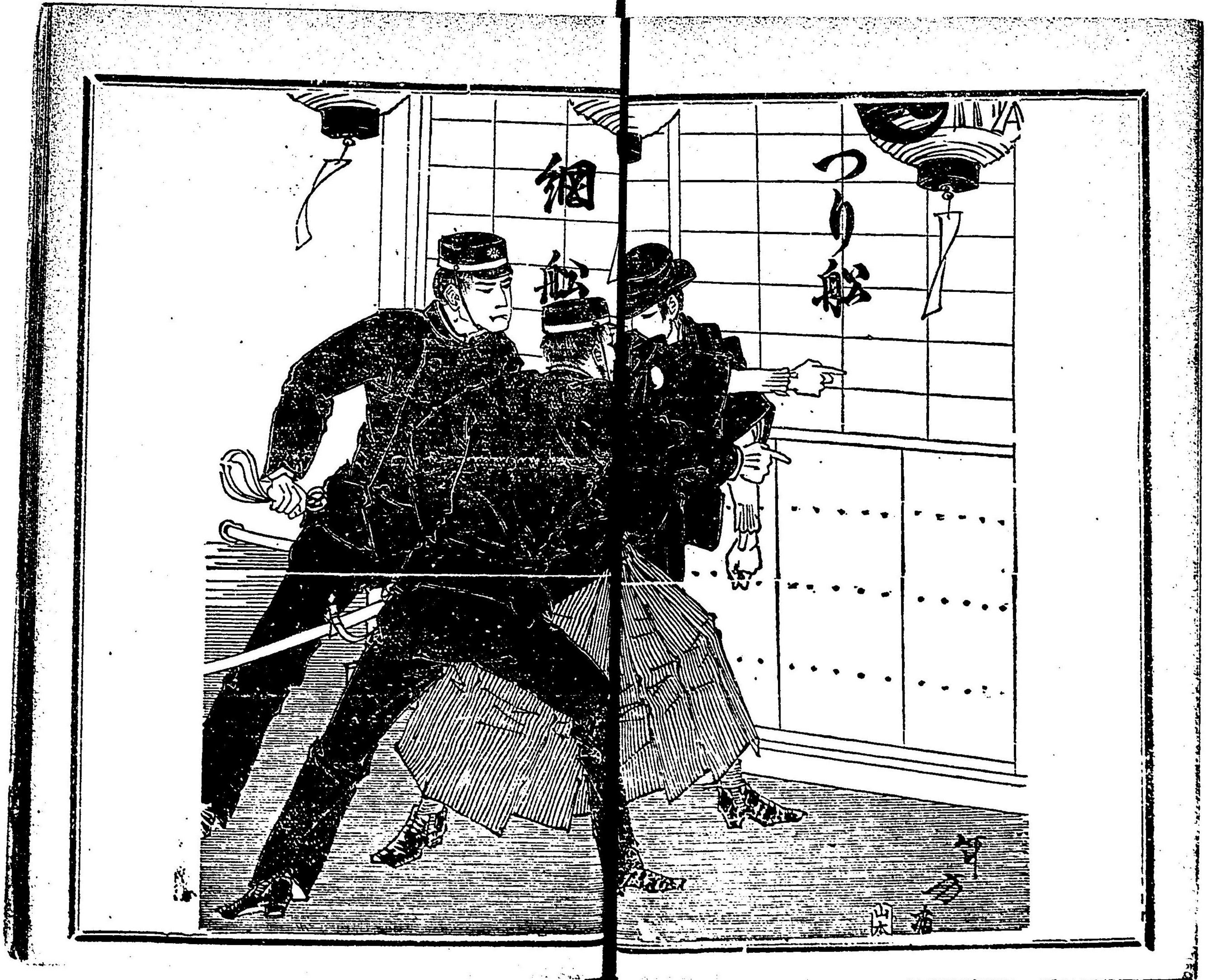
附云ふ本回の挿畫は此後の事を描きしなれば看客幸ひよろの心して見たまへ

第二十回

村雨さつと落し來て風は落葉のはらりと窓打音に眼を覺し品吉はあたり見廻し病  
勞れたる腕を延べて枕の上を掻撫ながら虫より細き息をつき「黙に侵されどろく  
と寐る間いへ怖ろしい夢に身体を苦しめられ覺れば愛身が嘆たれて須臾も心は安ま  
らず今此の憂目を見るにつけ思ひ出すは昔日のこと姉さんと立られて榮隆榮花をな  
せし身が欲に替みてろの身を忘れ何かし家の殿様を欺らかしたる其末に數多の財  
をうまくと騙り取たる悪事が露顯て合殿人の梅吉は新潟とやうへ通てしまひ此方  
は豫て二世かけて契りし情夫の浪さんと一先金春を立退て此の土地に住居を替へ柳  
橋から掲箆をして今一度花を咲さんと思ふた事の粗語ひ此の春からして思ひも寄ら  
ぬ此は業病驅幹の利す又浪さんはあるものを費ふの外は職なし是では行口と思ふ

うち着習は勿論手道具まで一個も残らぬ様になり貴客に貧苦を累ねしゆゑ此身の病  
氣は彌増し重れを醫療はさて置て賣藥買ふさへ成らざれば所詮本服する筈なく明日  
をも知れぬ命ぞと思ふふ附て今となり全く心を懸へし從々犯せし惡業の應報は思ひ  
當りしが夫と就ても浪さんは未だに非道が止ぬやら此身の病氣を苦にもせず夜とな  
く日となく酒博奕何處へ行やら彷徨て飽まで薄情せらるれども是も此方が薄情の報ひ  
と思へば今更に恨みん様は無れども又餘まりな仕方といふもの那云ふ人に連添ては  
却て病症の枷どもなれば片時も早う手を切て離れたいよも其の相敵をして賣ふべき  
人はなし責て兄さんでも東京に居なすつたなら是程困つた事もあるまいが夫も今  
では坂地へ行つたまゝにて一週の音信さへなき程なれば呼返せべき様もなしア、何  
どしたら宜らうと左らでも惱む病の床に悲嘆の露の置添て秋の小萩の枝たはみ枯る  
、ま近き風情なり折から破戸引開てツ、と遣入るは浪太郎何處で香だか足元も踏  
躑躅の酒機嫌品吉は見るよりも思はげに「お前また香だのかねへ眞實に夫ぢやア  
困るよト云へば浪太は顔膨らして「困るねへたア何の事々困るといふは手前のこと





細

船

つり船

出

何時見てもく面白くもねへ顔をしていつまで煩らつて居るのだへ手前が不吉な顔をするから昨夜も賭場に打負けて裸よされる所であつた吉の野郎に立替させ海と其の場を脱れて来たゆゑ今夜は是非とも其の復讐をうたねば蟲が治まらぬサア何なりと資本の貨物出したくくと云ふ難題品吉は當惑して少時返答もなかりけり

第廿一回

浪太が不法の言が、りよ當惑したる品吉は霎時あつて涙を拭ひ「無理なことを言なさんな妾しも好では煩らはないが惡運なれば詮術なし此程までは些とばかり衣類が残つてあつた故それを賭財よ上たれどもモウ一枚もない程よお前も今日から飛つりと博奕を廢め堅固になり賣ては妾しが少しでも働らく事の出来るまで切なからうが腕車でも挽て活計を立て貰へば平癒次第に妾が又思入れ稼いでお前よは好なお酒も飲せるから纒かの間の辛抱と思つて我慢をしておくれと頼めと此方へ聞入を猶も忿怒の聲荒らげ「手前が例の口癖に堅固よなれの腕車を挽いどろんな小言は聞倦た愈々賭資を出ぬといふならお主が着て居る其蒲團を持って行から此方へ出と早や立かゝる

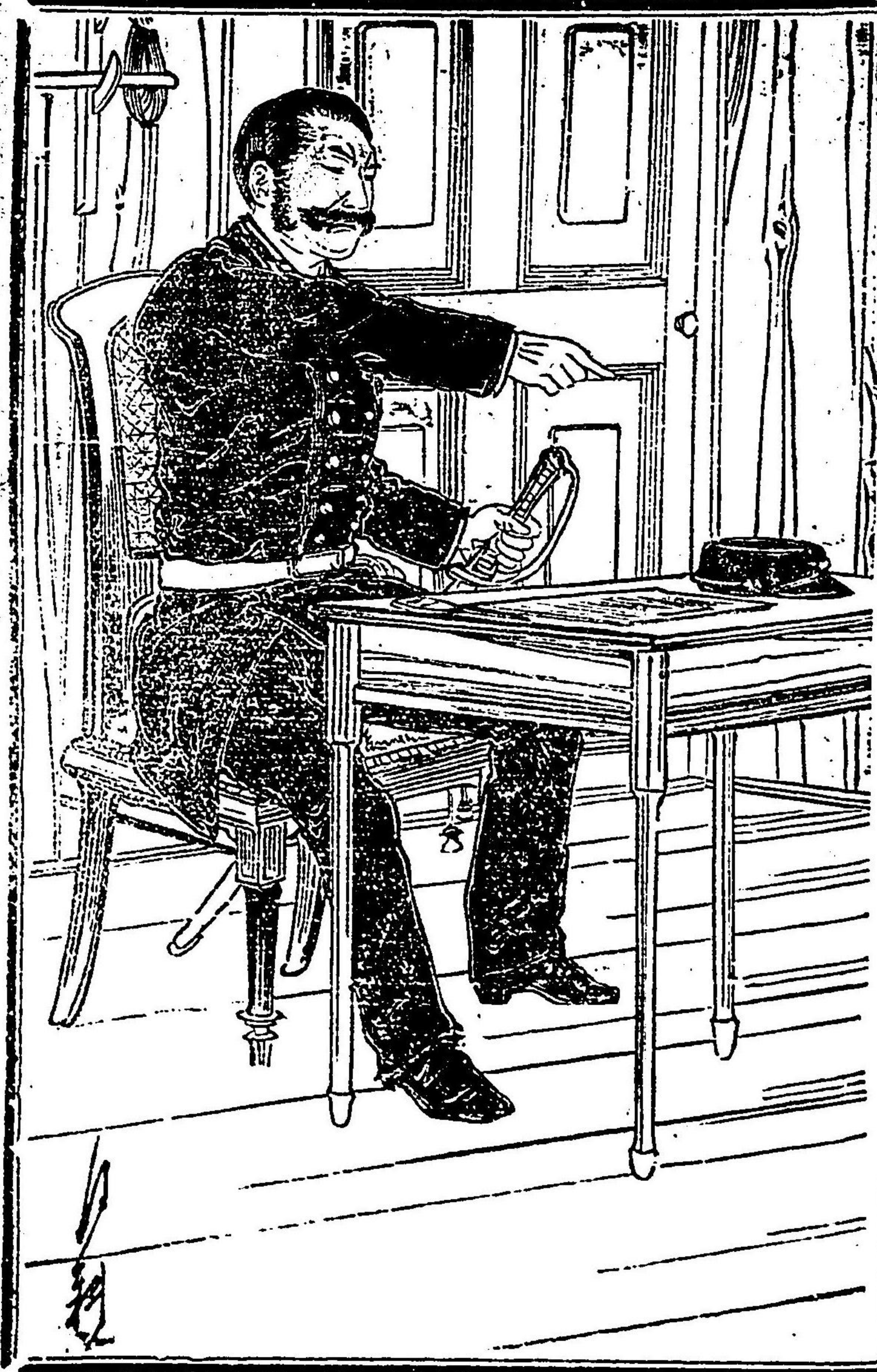
勢ひに品吉悲しき遣方なく差出す先を振拂ひ「此寒いのよ二枚とない蒲團をお前に取られては忽ち妾しが凍れて仕まふ是はつかりは免してと泣詫れども非道の浪太「エイ喧しいと突退て苦もなく蒲團を引操つゝ駈出す品吉が戻れども力なく共に引れてよろゝと踰限ながら立直るを情容赦もあらゝしく仰向さまゝ突飛して早くも戶外へ駈出せば品吉もあるにもあられず病苦も忘れて立上り續いて後より浪太郎が跡を慕ふて行空よ黑白も分ぬ冬の夜の星さへ見ぬ雪催ひ肌をつんざく北風の吹がまに／＼打寄する渚の浪も音高き此處は名に負隅田川架渡したる兩國の橋の袂に漸々と走り着たる品吉が息も絶氣よ向ふを見遣り「此邊までは見なれたれと到々影を見失ひ行先とても知れざれば最早追とも詮なからんア、何したら宜らうと橋の欄干に身を凭れ打察じつゝ居たりしが暫時あつて面を擧げ「オ、うれよ世よも人にも見放され斯淺猿しき身となるのみか重き病痼よ結ばれて藥は元より其日の物も心の儘にならざれば何でも未は野倒れその愛恥を隠さうよりも今此の河へ身を投て死ぬこそ遙か勝るべしと泣々小石を袂よ拾ひ橋の真中へ廻りつき欄干に手を掛て既

「斯よと見たる時忽ち後邊に人ありて「ヤン俵給へ」と云ながら帯際とつて引戻せば見咎られしか残念と振もぎつて又駈行を件の男は猶引止め」如何なる譯のあるよもせよ死すと事は濟なるべし必らず短氣を出し給ふなど言に此方は顔見て吃驚「チヤ爾仰しやるは野見様かと問れて彼方も訝かしく何者ならんと星影に顔を締視て居たりけり

第廿二回

我名を呼れて時介は最と不審に堪ざれば婦人の顔を情々と見れど定かよ見ぬ分ぬ故「爾云ふお前は何人か我姓名を知るからは定めて見知れる人ならんが夜目には顔も見決め難しと云ふに婦人は打點頭「久しい後の知己ゆゑ其の御不審は御道理申すも最と恥かしけれと妾し事は卿様と同じ在所の出生にてお品と申した淫奔者御存じないかは知らねども卿の兄御の涙さんと云ふに時介心附き「さてはね前は兄涙太郎といつぞや在所を亡命したまゝ、踪蹟不知になりたる後此の東京へ流れ来て今春に藝妓をして居ると噂し聞た品吉さんかお前の事も大抵は些仔細あつて聞たゆゑ昔し的事

は更めて此で開に及べねと合點の行ぬは此の風體命を捨んとするを見れば昔しの悪事が報ひ来て我れと心の鬼と責められ身を投んどの覺悟なるかろの悪業はさて置いて先死ぬといふは不了簡通りかゝつて止たは幸ひ應分の事にして上やうが先づ其話しをして見たまへと言はれて愈々面々に「死ぬる覺悟の身の上なれば其お詞に甘へまして申す譯ではありませんが此所で卿に逢たを僥倖お尋ねなくとも此方から言ねばならぬ身の懺悔を聞なされて下さいまし如何にも卿のお察し通り實の所は斯々でと浪太と二人で金春から此處へ移りて程もなく其身の病氣で入費の多くありたる上に浪太が身持悪しきによりて貧苦に貧苦をなし重ね今は其日の炊煙さへ立て兼る身の成果て並びよ今宵の事共をも落なく語り聞えつゝ、兎ても斯なる上からは生甲斐もない此の軀幹捨る外には道なければ慈悲に何卒見脱してと又も欄干に手に懸て死んど喘るを時介は後より周章て抱き止め「そういふとを聞らへは彌々以て見逃されぬ拙者も今は昔と違ひ出世といふには非ねども不自由ををる身にもあらねば今よりお前の病氣が平癒をるまで兄上に代つて拙者が買いで上げる必らず短氣を起さ



すに氣永く養生なさるが宜いと慈情も深き時介が言葉は此方に難有涕「うればごま  
でし仰じやるを背くは却て不躰ゆゆ夫なら御意は随ひまして死る心をやめませら  
さう得心が往たならば寒い風にも當らぬ機些ども早う歸るが宜いといひつゝ紙幣を取  
出し「是は誠に寒いけれど先づ取敢ずの持合せまた近日に此方から届けて上げるを  
お待ちなさいと先づ紙幣をば次は渡して此から送つて上たいけれど少く急ぎの用事  
があつて本所邊まで行く途上ゆゑ今夜は此處で別れるが必らずとも今云ふた私し  
の意見を忘れぬ様と猶懇ろに言諭し別れを告て立去れば品吉は後見送つて伏拜みつ  
涙にくれけりさて品吉は我家に歸り時介が恵みたる金を以て損料蒲團など借入れ  
來り久し振にて寒からず寐たりしが死れ難き定業もや身軀を風も當たるが痛く病氣  
の障りとなりて曉天近き頃及より發熱いとも甚だしく狂ひ死に死たるを夜明て近所  
の者が聞つけ不孝を憐れみ寄集ひて夫々の手續きをなし其死体をば某寺へ捨るが如  
くも葬りたりとぞかゝる果敢なき最期を遂げつゝ一枝の花をも手向る人なく餓鬼道  
に落ちるに至るも皆惡業の報酬なるべし

第廿三回

淺草奥山の群集の中に躊躇はりし兩人の男女いづれも年齢二十は足や足らぬの優  
姿よて華美なる衣服を着たるは往來の人も敬ひて側を避るばかりなり時に此方へ建  
列ねし見物小屋の木戸番が件の男女を見るよりも慌忙まげに聲をかけ「モシく鳥  
渡と呼止るに二人は後を顧視て「爾云ふお前は何人と男の訝かる状を見て女は傍か  
ら口をろへ「卿はお見知りあるまいが前方屋敷は使ふて居た馬丁の松藏と云に男も  
肯首さで「夫ならお前が品吉の「如何にも兄で御在ます野見様も姫様もお變りもない  
御様子で先は重疊れ目出たいこんな行粧でお目よかゝるも皆な己が心から面目次第  
も御座りませんが何時ぞは卿さま方にお逢申して前方のね詫をしやうと思ひながら  
稼業は遅れ不本意に存じて居ました處故慚愧を忍んで聲を掛お呼申した譯ですが何  
を申すも此處は雑踏染々お咄しも出来ませぬば孰れ近日御宅へ出てと云を時介聞わ  
へず「己の方でもれ前へ逢たら話さうと思ふた事柄が澤山あるからお前さへ構はず  
ば暫時のうち其邊の茶店で駕くり話しがして置たいが一途に來てはくれまいかと言

ふは何やら仔細のある様子に見ゆれば少しも遅々せず「木戸番は代人がありませうか  
ら仰せの如く其邊までお伴を致すとしませうと夫より二人は勝はれ地内の茶屋の奥  
へ通りて松藏に打向ひ「今更言つても歸らねば汝の事は咎めねを借て愆然なは汝が  
妹品吉が最期なりと是より過る夜兩國の橋の上にて品吉が投身をせんとする處を通  
りかゝりて抱き止め彼が目下の貧窮と浪太郎が行狀の不長とを測らる聞て不便と思  
ひ兄に代つて養料を月々幾許か與んと約し置たる事共を概略語り聞せし上其後彼  
が住居を尋ね病氣の容子を聞んどせしに早や其家は空家となりて住人なきと駭かれ  
近所の人に容子を問へば彼早已に逝去て世よなき人となりしといふ然らば墳墓を  
教へてと此程彼が菩提所へ行き寺僧に頼みて形計の追福さへも營しと語るを聞い  
て松藏の感喜の涙止めかね愆然として居たりけり

第廿四回

さしも非道の松藏も悪には悪の應報ある争はれぬ道理と感し其改心をせし處へ此の  
物語を聞かると感泣の涙止めかね打蕪れつゝ居たりしが稍あつて目を展敷き「其の

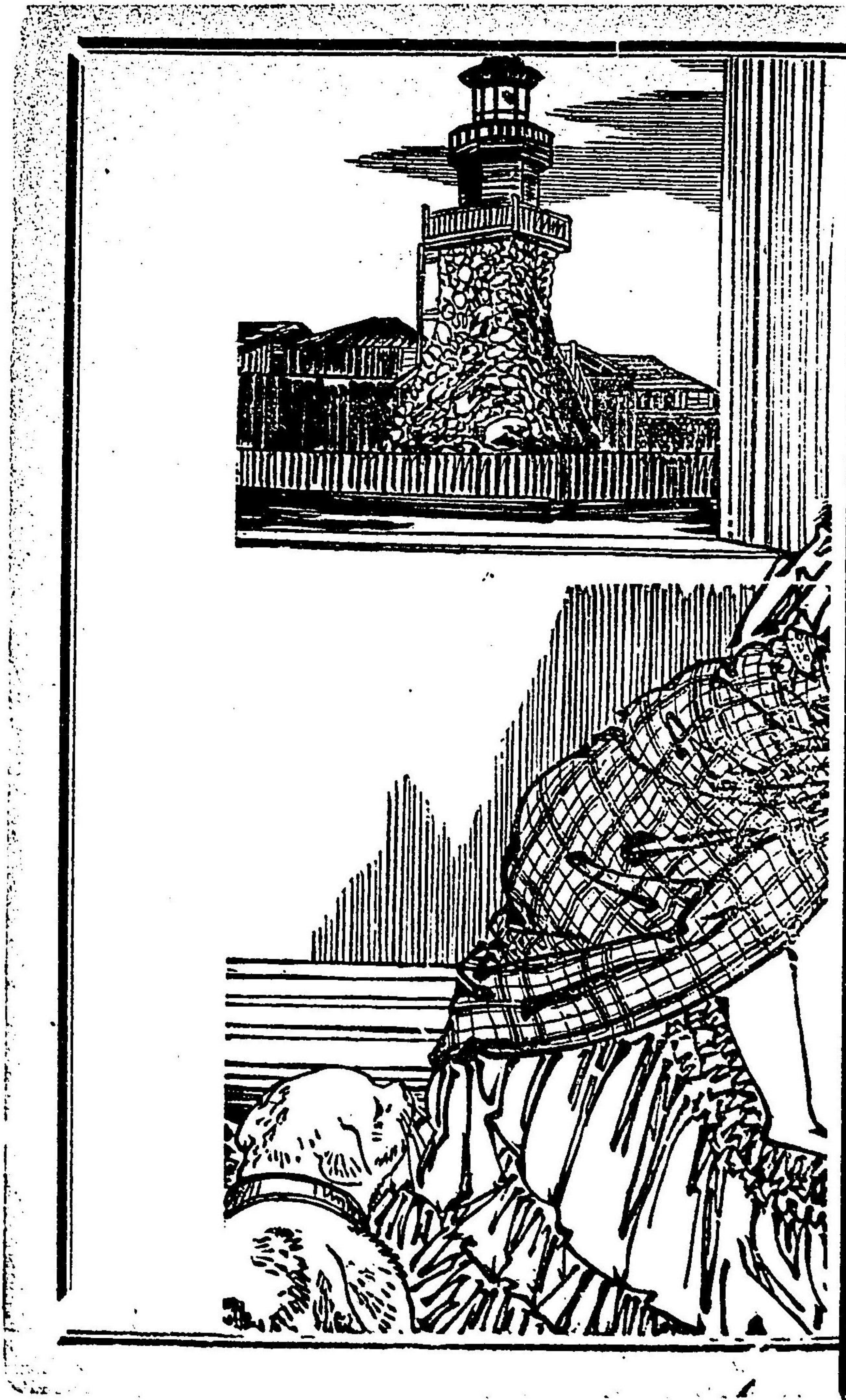
お咄しを承はつて小生の疑念も晴れた小生事は一昨年の秋よりかけて當春まで聞  
きこの身を隠さん爲めに諸所方々と彷徨て此地の容子を窺ふ中今は其官の探偵さへ  
も左程に厳しくない様子ゆゑ早く歸れど知邊の許より筋かゝ報して呉れましたれば  
直様こつちへ歸り來て妹の在所を尋ねる中に圖らずも兩國邊で見たといふ人ありし  
を頼みよ彼處邊を尋ね廻りて漸々尋ね當りしかど其時は早や跡の祭り住みたる家も  
貸家の札此の抑も奈何よと打蕪ろさしがさてあるべきにあらざれば夫より卿と同じ  
様に近間の者に菩提所へ尋ねて其所へ往て見れば表の碑はなけれとも掃除も奇蹟に  
行届き松などさへ新しさを供へてあるよ訝かしく寺の僧徒に様子と聞は何方の方か  
知らねども過る日使の者を以て回向料を遣はされ佛の供養を頼むとあるゆゑ其の  
名前をば尋ねしかば仔細ありとて包るゝを強て問んも益なれば其儘にして置きた  
るが其後彼處の墓所を見るに何時も奇蹟にしてあれば夫も定めて彼人の志よてあ  
るならんと教へられしに猶も又た其の不審さり解やらず今日が日までも其事のみ不  
審に思ふて居りましたが夫なら卿が彼墓の掃除もさせて下さいましたか何とお禮を

申さうやら兎ても詞に述盡されねば向後心を改めて一人前の男となり卿のお爲になる事は身に引受て御奉公致す所存で御在ます夫は兎もあれ最前かられた兩人様が斯なすつてお揃ひでれ出なさるは何やら姫様のお願ひが適ふた様よお見受け申すといふ輝子は顔打報め左も嬉しげに差俯くを松藏猶も詞を繼ぎ「借又た次は親いたさは御前様の事で御座ります壯氣の常とて酒色の爲は御心亂れて御不行跡の日より暮らせ給ひしも元はと云へば吾々が皆惡意より起りしと申ともなか〜お恐れ多いが其後のれ家の成行はと恐る〜問出たる後の話に例の次回に

第廿五回

松藏は問ひかけられ時介答へて言ひけるは「其後お家の成行は云ふも不便の事さなり日外不忍の待合にて殿が熟睡し給ひし油断を見濟し品吉が盗み取つた實印よて三人が腹黒くも諸方は負債の山を拵らへ其借入れたる財を持ち何れへか送電せしより館の擾動一方ならず彼是するうち諸方より負債を返せとはたらる〜と覺ゆなりとも云はれねば餘儀なく郎を人手に渡し其負債を償はれしが其日よりして武定君は

昨日に變る御情態本所割下水にさ、やかなる家を求めて移り給ひ朝夕お傍にあるものどては下婢の外に一人もなく物憂月日を送り給ふと仄かに人より聞しゆる輝子は素より小生さへも一方ならぬ駭ろさに直様彼所へ車を馳て我家へ迎へ來りしが今に殿にも恙なく吾等と一所に居給ふなり借又汝が尋ねたる是なる輝子が身の上は既に汝も知る通り一昨年の秋我兄の浪太郎が爲に勾引され佐内坂なる梅吉が姉の家よて梅吉に身を垢さる、所なりしを首尾よく遁れて尋ね來り過し事ども物語り夫より我師は始終の事を明して宿所に止置つ日を經て屋敷へ歸さんと思ふ折柄圖らず聞しれ家の滅亡此は如何にして宜らんと思ひ悩むを我師匠ちかく招いて言る、は斯る不幸に遭たる者を救援て遣らぬは本意ならぬ殊に卿の兄とやらが元と仕出せし事なれば飽まで輝子に力を添へて武定の在所を探逢して遣るころ正當なれば然らば我も共々よ力となりて得させんと諭されしより我も亦其意任して輝子をば該家に匿まひ置うち已れも人引立られて事欠かぬ身となりたれば新た家をも結構て住はせるとは行かねども輝子と一所に居らんよは世間の聞はも如何ならんと思ひしゆゆ更





輝子は元のまゝ、師匠の家に預けて置きしが己に前にも云ふ如く武定君を本所より迎ふる事となりしより斯深切を受る上は不束なれども妹を女房となして給はりたしと武定君が只管に言ひ給ふを我師匠にも相談せしよ左もあゝるべき事共なりとて結婚を勧めらるゝに從ひて斯の夫婦になりたるなりと語るを松藏聞了はりて只ぞ感激の外なかりける、さて彼の時介が實父なる野見龜藏の家を在し悪漢の梅吉は其後日敷を經るゝ隨ひ儲蓄金も少なくなり詮方盡し處から或夜密かゝ同村の某方より忍び入り窃盜をさへなしけるを追跡せられて捕へられ捕縛の人となりたるよし父龜藏より報せよ由りて時介斯と知りたれば彼と云ひ是といひ争ひがたさ數なりとて早速松藏を呼寄せて其等の道理をも論じけるに愈々心を改め善人となりたるにぞ時介は憫れみて夫々慈恵を加へやり父龜藏れ雪をも纏て手許へ呼寄せて是迄の貧困には似ず心儘に孝養を盡しけるほどに輝子お雪も睦み親しみ一期目出度榮ゆるよ一聞くがまよく編者桃江が運ばぬ筆に斯は物しぬ

新説小簾の月大尾

明治二十三年九月一日印刷  
同 九月六日出版

發行者 日吉堂 菅谷 與吉

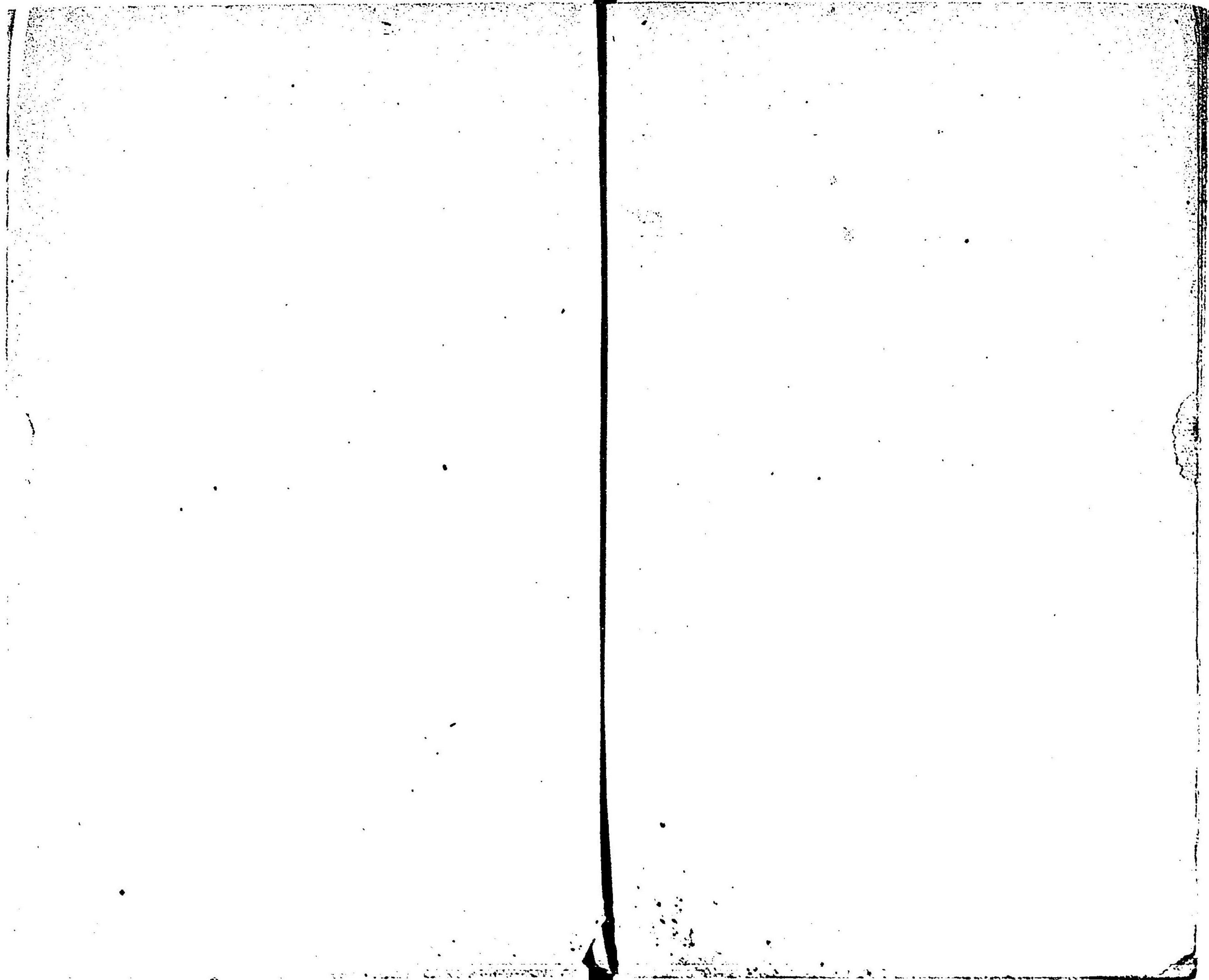
神田區佐久間町壹丁目九番地

印刷者 龍雲堂 大場 沃美

同區柳河原岸第十一號地

專賣店

本石町二丁目	上田屋榮三郎
淺草三好町	大川屋錠吉
横山町三丁目	辻岡文助
馬喰町二丁目	山口藤兵衛
通り四丁目	金櫻屋
全	明進堂
小傳馬町三丁目	近江屋園吉



日吉堂新刻出版書目錄

雲霧阿長青木夕榮	刺繡小常綾女丈夫	人情美談野路之花	大岡於富與三郎實記	政談	名譽長者鑑	慶應水滸傳	廊雀小稻出來秋	姬萬兩長者鉢木	敵討裏見葛の葉	昔語千代田乃傷	匪 匪 鄉 談	女天一花園於蝶	鈴木主水實說美談	文覺上人物語	濱邊の荒瀆	春色日本魂	一舍時雨笠森	成田山力士仇討	駿甲俠客濱松風	東俠客河内山實傳	
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
正價金十錢	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十二錢	金十五錢	金十五錢	金十二錢	金十二錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十錢	金十二錢	金十五錢

南柯泥屋辰五郎之傳	奇聞	明治水滸傳	操鏡女大學	松竹梅三人娘	稻生武勇傳	五月雨日記	實說名畜血洋磨	貞烈美談漂一節	西洋天一坊	實說有馬猫騷助記	各國才子寄合演說	春色花合戰	花鳥風月	人情美談朝顔日記	實錄泉嶋吉	明治俠客傳	草履打藝者達引	敵討黃金鮫	新編春告鳥	新說小籠の月	
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
正價金十五錢	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	
金十五錢	金二十錢	金十五錢	金十五錢	金十錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金二十錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢	金十五錢

